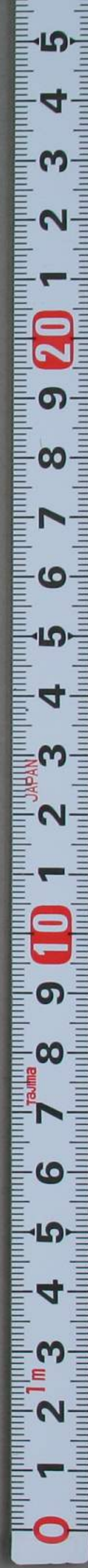




蘭使日本紀行

十二

ル 3  
1138  
12





ル 3  
號 1138  
卷 12



龍涎香

根原

此異鳥ハ將軍ノ献上品中ニ養スル所ナリト云  
 ヲセリオニハ巨額ヲ散逸スルカ為ニ大ニ快レ  
 トセス終ニ藤堂候ハ詠官ニ囑ミテヲルケル  
 六鸚鵡四白鹿ニ野猿長臂月ニ達スル者ニ鱈魚  
 最小ニメ能ク飛テ者ニテ購ハレテヲ托セリ答  
 テ曰ク盡ク以テ需ニ應スヘシト  
 詠官助在衛門書ヲ寄テ曰ク薩摩候一大塊ノ竜  
 涎香ヲ所持ス重量百三十磅アリ一万口千ター  
 ルニテ購求スル所ナリ又日本人時々龍涎香ノ  
 小塊ヲ密賣スル者アリ抑々龍涎香ノ根原ヲ説



ク一ヲラス或ハ曰ク鯨魚ノ糞或ハ精液ナルハ  
シト或ハ曰ク海礁ニ生スル海綿状土ナリ波濤  
ニ蕩揺セテレテ碑裂ニ其輕キヲ為ニ水面ニ浮  
泳スルナリト此説真キ近ニ學士ベルナルドハ  
リゲニエスリニスコーテ止ノ説ヲ取ルニ同ニ  
龍涎香ハペウキノ類ナリ地中ニ生シ形脹シ日  
光ニ觸ラ硬固トナリ恰モヘルセレステイニ及  
ビ珊瑚ニ粘ケルカ如ク源ヲ鯨ニ求ムルハ抑モ  
妄ナリ苦シ吏シ鯨魚ノ糞或ハ精液ヨリ生スル  
者ナラハ心ヲス鯨魚ノ多ク游泳スル地ニ多ク

ルハキナリ然ルニ今之ニ反シテゲルニシラシ  
ドレスピツツヘルケニハ極テ鯨魚多キ地ナル  
モ絶テ龍涎香アルヲ見ス却テツツトモオシビ  
クメリンデナルビセ諸島高麗岬日本ノ薩摩  
印土地方ニ龍涎香ヲ産ス但ニ此諸地ハ絶テ鯨  
魚ヲ見ス或ハ偶之ヲ見ルナアルモ甚々稀ナル  
所ナリ  
此龍涎香ハ灰白ニメ白線ヲ現ス故ニアムベル  
グリスノ稱アルナリ里色ノ者ハグリスノ称ニ  
適セスグリスハ灰白之ヲ試ムルノ最好法ハ細鍼ヲ刺入



スルニ多脂ナルハ佳品ナリ。印土貴人ハ食物ニ  
多量ノ龍涎香ヲ和用ニ風味ヲ美ナラシム。パリ  
エダヒユス曰龍涎香ハ自香アルヲ以テ臍及ヒ  
心ヲ強仕ニ胃中ノ多液ヲ除去ニ又總テ老人  
及ヒ冷血ノ人ニ佳ナリ。

又樟腦ノ事ヲ記スルノ書出島ニ至リタリ薩摩  
ノ職工樟腦ヲ製スルニ大ニ勞ス而シテ勞多クニ  
テ利少クニ故ニ皆銀坑ニ從事スルナリ。支那龍  
腦ハキシセウニ産ス日本ニテハ薩摩ニ産ス大  
ニ波羅産ニ異ナリ一磅ノ波羅龍腦ハ日本或ハ

支那産ヨリハ六十倍ノ貴價ナリ。抑モ樟腦ハ胡  
桃ニ異ナリナリ樹ヨリ出ル一種ノ護謨ナリ。幹  
ノ内部ヨリ滴出ス其液白色ナリゲールニ匹ニ異  
ナラス分テ四種トス。印土人ハ此各種ヲ精製ス  
ルニ四種ノ篩ヲ用テ細篩ヲ以テスレハ最粗品  
ヲ得粗篩ヲ以テスレハ精品ヲ得龍腦ノ汚垢ハ  
熱湯ニ橙汁ヲ和シ篩ニテ濾過スレハ清浄ニ為  
スヘシ。日産ニテ乾カセハ愈白色トシ東印土商  
會ハ薩摩樟腦ヲ索メス蓋シ其製造ヲ廢止シ夕  
レハナリ。



漆器商ノ盛ナルハ。往時ニ異ナラス。抑モ漆塗ノ所業驚クヘキモ。此漆ヲ生スル蟻ヲ厄モ驚クヘシトス。漆エハ漆塊ヲ粉碎シ溶解シ適意ニ各種ノ漆料ヲ調和シ長圓楕快ノ模型ニ注ク。此塊ヲ熱ト為シタル木面ニ塗ル。瓜ノ厚ナルヘシ而ノ粘着シタル漆ヲ更ニ藁或ハ乾煙ニタル蒲ニテ擦ルナリ。此ノ如クニシテ製シタル箱櫃卓子等ヲ日本及ヒ支那ヨリ夥シク歐羅巴ニ輸送スルナリ。

漆ノ根源ヲ説ク舊理學家大ニ説ヲ異ニス。殊ニ垂刺伯人ヲシス。及ヒセラゴオ曰ク漆ハ天ヨリ垂刺伯ヲルベシ樹上ニ下ス所ナリトナル。アスアブアル曰ク皮求人流水ニ漂搖シテ凹所ニ隼積シタル粘土中ニ樹枝ヲ挿シ置ケハ其枝ニ蟻夥シク附着生長ス之ヨリ多量ノ漆ヲ得ヘシト又東印土ヲ遍歴シタル葡人ノ見ル所左ノ如シ。皮求一此地ハアラカシ東捕塞瓜哇及ヒ支那ノ間ニアリ。ニ一大樹アリ其葉全圓表緑裡白撒里ニ異ナラス。味澁簽ナリ花アリ香ナシ其實ヲエベレト稱ス。此樹ニ夏日夥シク蟻ヲ附ス。常ニ其樹ノ

何クハ漆ノ  
漆ノ製法



日本紙蘭  
行略三起子紛議  
アリ

三九

護謨ヲ吸御出人之ヲ猶蜂ノ密ヲ造ルカ如シ枝ノ  
周圍ニ漆ヲ造ルヤリ枝ノ全部虚隙ナク透明赤  
色ノ者愛シテ里色トナルニ及テ之ヲ截リ乾燥  
セシム此枝上ニ蠟ヲ附スト愈多キハ愈佳品ナ  
リ後漆ヲ枝ヨリ削落シ皮ト共ニ収メ貯メ枝  
ハ大ニハ一セリルニ同シ大ナル實アリ外  
下ニ涇キ裂タリ漆中常ニ蠟翼ヲ混ス  
ガカリマスリゲナリルハ伯帯比亜ニ小旅行  
ヲ為セリ但シ速カニ再來シテ日本將軍ニ第二  
回ノ使節トナル午六百五十九年江戸ニテ談合一執

政ノ大評議ヲ斯ク称ス一アリ蘭使長寄ヨリ江戸  
ニ至リ旅路ノト就諸説紛々ナリ或ハ曰ク蘭  
使ハ陸路豊後ヲ経テ小倉ニ至リ下ノ関ニテ上  
船スレハ年々博多海ニテ危難ニ遇リノ災ヲ避  
クルニ足ルベシト第一執改此議ヲ偏固ナリト  
信スシ氏之ヲ破ルヲ得ス則チ使ヲ將軍ニ仰ク  
ヘシトセリ然ルニ典兵衛様曰ク此ノ如キ小事  
豈ニ將軍ノ聴ヲ煩ハサシヤト依テ建議ヲ止メ  
リ而シテ蘭使舊ノ如ク水路ヲ執ルトハナシリワ  
一ケナリル諸事ヲ整頓シ献上品及ヒ他ノ荷物



ヲ借り船ニ積ミ更ニ一小舟中ニ榜者刺産ノ呪  
牛ニ頭ヲ載ス二月二日長崎ヲ出帆セリ上途前  
ニ商人ユールネストフハシホーゲンフーノ及  
ヒコルホリスムルクニ諭セラ毎夕信心者ヲ檢  
ミテ之ヲ救シメカ決シテ之ヲ怠ルテ勿ルヘ  
シ女身ノ者タリ氏取テ之ヲ怨スルテ勿レト  
ワトゲテイル海上逆風及ヒ大電歸ニ逢テ漂  
搖ニ遅々且ツ困難ナル航路ヲ經或ハ數日停泊  
シ假令船内ニ在ルモ恰モ囚獄ノ如キ想ヲ為シ  
一人モ敢テ直立シ得ル者ナク皆伏臥スルニ

加之寒威凜冽食料缺乏ニ衆皆免カレ可テオ  
ラ知テ受苦スルノ既ニメ海上ニ漂搖スル  
四十四日ニテ三月十五日始テ大阪ニ着セリ  
堺ニ近接ニテ進行シテヲ眺望スルニ非常ニ結  
構ナリ大阪ノ下五里ニアリ日本有名地ノ一ナ  
リ此地ノ住人日本全國ノ貴人ナリト自負ス諸  
侯及ヒ王公ト婚嫁ス往時内國戰爭ノ際日本全  
國顛覆シ内裡尚居ヲ寧セスト虽人敢テ堺ヲ侵  
ス者ナシ他ノ土地ハ屢兵馬ノ蹂躪スル所トナ  
リタシ共獨堺ノミハ一步ヲ入ル者ナカリシ西



ハ海ニ面ス。濠アリ。水ヲ盈ツ。次才ニ山ニ上ルヲ  
以テ外攻ヲ防クニ足ル。壘ニ灰白色ノアルドイ  
シ名ヲ堅固ニ築造シタル非常ノ高壁ニテ防  
禦スルノミナラス且ツ其城ハ山ノ頂上ニアル  
ヲ以テ容易ニ攻ムルヲ能ハス。球壁十五アリ  
リ唯一小徑アルノミナラシ他ニ進ムヘキノ道ナシ  
以テ全市ヲ保護スルニ足リ。又山ニ對スルノ壁  
ヲ防禦スルニ足ル。此城ノ側ニ第二城アリ。山ニ  
倚ル。其大ナリ。如クナラス。但シ其高リハ相讓  
ラス。大ナル灰白石ニテ築ク。所其頂上ハ氣中ニ

衝ク。下五十尺ナリ。又一側本城下ニ接シテ立派  
ナル宮殿アリ。紀伊侯ノ居ナリ。堺ハ此部下ニ屬  
ス。二個ノ高橋アリ。市上ニ突出ス。大ナル者八九  
層ナリ。愈上レハ愈小ナリ。然レ凡尖  
端ニ終ルニアラス。

市前海中ニベリス島アリ。周圍平地ナリ。常ニ  
人羣群集ス。是觀音ニ詣スルナリ。多クハ朋友及  
ヒ見セヲ伴フ。此宗派ノ僧群人ノ前ニ進行シ。鐘  
ヲ鳴ラス。觀音ヲ岸ニ繫キタル日本一小舟ニ導  
ク。此舟ニハ三檣ヲ立テ三帆ヲ張ル。竿及槍ニ長



キ旗及ヒ絹ノ吹流セラ疾ソ。此舟ハ漆塗ナリ。且  
 ソ高價ナル画彩アリ。準備ニ夕ル人鐘聲ニ應ニ  
 ラ踊リ終ニ舟ニ入り陸ヲ離シ頸腹及ヒ足ニ重  
 大石ヲ繫テ塚ニ向テ頭ヲ傾ケ身ヲ翻セラ海ニ  
 入ル蓋ニ觀者ヲ信心スルニ出ル所ナリ。之ヲリ  
 前ニ日佛堂ニ於テ誓願スルノ後ニ之ニ及テ十  
 リ至レバ此ノ如ク自死スル者皆必テスニモ信  
 心ノ為ナルニテラス。或ハ貧困ニ逼リ或ハ不治  
 ノ疾病ノ為ニ生テ歎テノ極是ニ至ル者アリ。此  
 ハ一不ス鳥ノ中央ニ二高山アリ。一大觀音寺ア

言

リ山側ニ石ニテ築ク其壯嚴ニテ大段ニ在ル  
 者ニ劣ラス之ヲ見ル者ヲ驚カシム。又此島ノ周  
 圍ニ各種ノ舟アリ。皆前ノ同目的ニ出ル者アリ。  
 此島ニ斜對ニテ水城アリ。塚ノ木端ヲ載断スル  
 ノ山脚ニテリ。構造壯嚴且ツ精巧ナリ。大橋アリ  
 ニ層ニニテ高ニ四方大石ニテ築ク山ニ向テノ  
 二大道アリ。其極ニ又四角ナル橋アリ。其上端ニ  
 平ナル屋根アリ。此水城下ヲ通過スル船舶心ヲ  
 ス税ヲ納ム。  
 此城後ニ海灣アリ。岩石上ニ築クノ水城壁ニ概



ノ其高キ一丈ニ上ルカ如ク此港ニハ壁アリテ  
町ヲ鎖ス此壁灰白石ニ成ル水中ヨリ採ル所ナ  
リ唯山ニ行クヘキノミ塚ハ山ノ半腹ニアリ乾  
濠アリ然レ石堅固ニメ且ツ高キヲ以テ外攻ヲ  
拒クニ足ルト虽尚山頂ニ在ルニ成ニテ防禦ス  
水城ニ對スル堤ヲ距ル一丈アリスノ華蓋ナ  
宮殿アリ塚奉行ノ居ナリ邸内大橋アリ屋根高  
ニ海上數里外ヨリ見ルヘシ  
塚ノ内外ノ諸建築皆大灰白石ヲ用テ是近邊ニ  
アル岩石ニ採ル所ナリ市中ニ一規則アリ竊盜

違式聞事訴訟ヲ許サス聊カニテモ變事アレハ  
市門ヲ閉テ罪人ヲ刑吏捕ヒテ之ヲ裁判所ニ拘  
引ス重罪ハ勿論輕罪ニテモ之ヲ許ス一ナレ市  
中此ノ如ク嚴法ヲ設ケレバ僅カニ堤外ヨリ石  
ヲ投スル者アレハ忽チ自刃ヲ閃ス一ナリ  
又塚ノ寺院壯麗花美ナリ日本他地ノ及ハナ  
ル所ナリアラカレ皮水東埔塞臺灣交趾波羅ビ  
一ネレ高麗支那暹羅ノ異佛ヲ奉スルナリ又未  
知國蝦夷野蠻人ノ奉スル恐レヘキ異佛アリ  
此ノ如キ各宗ノ寺院ハ往時羅馬ニ存セリパレ



テカレト称スルアリテキユス帝ノ  
子アリクワバノ建築スル所ナリ當時寺ニ  
村ヲ為ス則チ六百七年スボニハキウス  
三ノカス帝ニ由テ恣ニ聖母摩理及ヒ  
ニ歸セリ當時ハマリアロトシト称ス精  
ル築造家セバスワアリエセルナリ  
如ク其築造ノ完全ナルト他ニ無類ナリ  
模範ト云ヘシ最初ノ善美ヲ保持スルニ  
凡クモ誹議スヘキ所ナレトモルヘス  
ニユスノ時ニ方テ焼失シタルヲ以テド  
アニユスノ再建スル所ナリ後トナ  
時ニ方テ再ヒ電火ノ為ニ損傷シタレ  
アドニアニユス之ヲ修理セリ屋根ハ  
スルノ葺クヘナリ子公坦丁帝之  
ヲ剝離シシトナリ是ニ於テ  
トネレノ手ニ落ク則チ之ヲ埃及ニ  
シテオシ中ニハエビナリマルスヘ  
ヒ他ノ諸佛アリ又アキユス及ヒ  
リバ神アリ

希臘史家バウサニアス証言ス  
アテネ又希臘



暹羅佛未皇

暹羅王送葬

ニモ諸佛ヲ皇ルノ寺アリ  
ヲ記スル書アリ中ニ記ス曰クベリアリ村ニ極テ舊寺アリ  
人工ノ築立エニアリ全村ヲ一見スヘシ此寺ニ  
諸佛ヲ安置スレハリア語ニテハペキルアト祇  
ス希臘語ノバンテオトニ同シ諸佛ノ寺ノ意ナ  
リ

堺ニアル有名ナル寺院諸像ノ外大ニ驚クヘキ  
ハ女子ノ像ナリ暹羅ヨリ拉棄スル所ナリ其由  
来ヲ説クトスルハ胸中不快ニシテ嘔吐ヲ獲ス  
ヘシ暹羅國ニテハ王族中死者アルキハ滿一年

ニ六日ヲ減スルノ時日間屍體ノ臭穢ナルニ拘  
ラス之ヲ埋葬スルナリ既ニ此期ニ至シハ潤  
キ市場ニ於テ此腐敗セル體ヲ焼キ茲ニ精巧且  
ソ多費ノ塔ヲ築ク其高ナニ三百尺ニ過ク此塔ノ  
内部ニハ非常ニ太キ長キ柱アリ松ニテ構造ス  
但シ外部ニハ編ミタル遮蓋ヲ掛ケ立派ニ画キ  
且ツ鍍金ス金構造一塊ニ成ルカ如キ外見ナラ  
シム此塔ノ周圍ニ各種ノ小塔アリ高ナニ百二十  
尺一塔ヨリ他塔ニ達スヘキ廊下及ヒ小道アリ  
塔前列ニ一大塔アリ他ニ比スレハ高ナニ三倍ス

寺院與  
廢ノ



四門あり。此内ニ巧ニ彫刻シタル太キ柱ヲ立ツ  
寺中ノ記念標ニ異ナラス。塔内亦然リ。此柱及ヒ  
天井ハ地上六柔ナリ。方室ヲ設ク四角ノ椅子アリ  
リ。非常ノ高價ニ人長ナリ。鍍金スルノミナラ  
ス。緑色硝子ヲ飾ス。其美麗驚讚スヘシ。茲ニテ屍  
ヲ焼ルナリ。此建物ハ王宮ヲ距ル一六放銃許ナ  
リ。其間赤色ノ竹ヲ以テ左右ヲ分ケ。牆トナシ。其  
外ヲ觀者ノ用ニ爲ス。觀者ノ員數十万ニ及コト  
云ノ。行道ノ兩側ニ假屋アリ。四柱ニテ又外部ニ  
金箔ヲ装スル幕ヲ張ル内ニ鉢盂草色ノ僧衣及

ヒ米ヲ置ク。

棺束ルニ前ニ市中ノ幫間奇怪ノ態ヲナシ。通行  
シ。次ニ金器ヲ大小取交セ。火所ニ運搬ス。王宮ト  
火所トノ間櫓敷ニクニ列ニ引ク。櫓上ニ驚怪ス  
ヘコ異像アリ。藁ニテ造シル象龍帛又半身ハ人  
ニノ半身敷ナルアリ。各背上ニ椅子状ノ坐所ヲ  
設ク四角ナル四脚アリ。皆巧ニ画彩ス。某ノ坐所  
ニハ檀香ヲ滿ク。以テ死ヲ焼クノ用ニ供ス。此人  
造異形物ハ繩ニテ結束シ。数千人ハ共ニ前行ス。  
前ニ記スル赤漆竹牆ニ泊テ暹羅僧ヲ現ス。而ノ



人造命ノ傍ニ坐ス。此僧ノ後ニ王子ハ各象背上ニ乘リ最季子ハ母ノ遺體ヲ載セタル車ニ騎ル。此車ニハ人造象ヲ麻繩ニテ結縛ス其上ニ金環ヲ置ク各一オヨリ潤ニ極ハ長廿高卅人身ニ三倍ス長廿六尋ノ四輪車ニアリ。

諸事工カト費用トヲ盡シタリ殊ニ棺ヲ載スル柩ニ厚キ黄金ノ延板ヲ張リ諸器物ヲ棺ノ柩ニ至ル迄總テ真珠、青光ノ碗子ヲ施シ棺ハ珊瑚、金剛石ノ粧飾アリ黄金ノ釘、鍍光ヲ添へ燦トメ人目ヲ射ル人造ノ象、犀、象、龍其他異形物

ハ柩車ト共ニ徐々ニ進行ス其兩側ニハ觀者堵ノ如ク皆帽ヲ脱シテ列ヲ正シ立ツ但ツ鑿者アリテ綿密ニ之ヲ制スルナリ遙ニ後レテ國王ハ北象ノ胴ヲ金ノ鍔リアル白布ヲ以テ巻キ素絹ノ褥ヲ置キ其上ニ坐シ頭ニ大ナル帽ヲ冠リ瑪瑙ノ首飾ヲ施シ其下垂スル者肩ニ及テ國王ノ後ニ貴族ノ人々頭ヲ低シ躬ヲ曲ケ小刀ノ如キヲ佩テ棺ノ火所ニ達スルヤ何等ノ貴重ノ品ハ虽遺體ト同時ニ火中ニ投テ之ヲ燒キ終リテ後遺骨ト金塊トヲ拾ヒ取り骨ハ鏽ヲ以テ包ミ金



ヲ流シタル塔ノ内ニ納メ。金塊ハ後ニ死者ニ擬  
 シテ有像ヲ造ル中ノ用ニ供ス。此有像ハ平日死  
 者ノ信シタル宗寺ニ造リ其為ニ設ケタル廟所  
 ニ納メ。此國風ニテ人民常ニ十四日毎ニ頭髮ヲ  
 剃去ス。然レニ王ヲ焼クノ後ハ毛頭ヲ洗フノ儀  
 此ノ如キ暹羅佛及ヒ寺ハ塚ニアリ。今大ニ尊信  
 スル像ノ由來ヲ詳説スヘシ一大奇話ナリ。千六  
 百四十九年二月二十三日及ヒ且翌日ヨケレフ  
 ハシモイデレ暹羅首府エゴレニ在リ合衆阿蘭  
 東印土會社ノ命ニテ其地商業ヲ營セリ。二月二

十三日譯官ヨリ使ヲ遣シ女王ノ産ミタル女子  
 死去セリ。其葬儀ノ盛粧見ルヘキ者アリ。來テ一  
 覽セリト。依テ直チニ出テ行タルニ告知ノ遲延  
 セルヲ以テ。此時既に棺ハ火所ニ到ルカ故ニモ  
 イデレ該地ニ到ラント歎スレド。阿蘭人ハ火所  
 ニ行クヘカラストノ王命アルヲ以テ進行スル  
 一ヲ得カリシ。甚遺憾トス。但シ和蘭人ノ為ニ設  
 クル棧敷アリ。火所ヲ距ルテ遠カラヌエ。中  
 大市ノ中道ニ王宮ヨリ見ルヘキ所ニ橋ノ如キ  
 五塔建ツ。何レモ金ヲ装ヒタル。造リ以テ之ヲ固



三四塔ハ同形同高ナリ。正四角ナリ。此四塔ノ中間ニ大且ウ高ナル一塔アリ。四塔ハ皆其高廿二寸。尋中間ノ一塔ハ三十尋ニ達ス。總テ金彩塔爛人目ヲ眩ス。大塔内ニ非常ニ高サ六尺ノ石ノ棺臺アリ。三女ノ死ヲ焼ク所ナリ。

⑤

遺體ヲ大所ニ送ルノ前六月間宮内ニテバルセム。樹脂ニ浸ス。王ノ裝飾ヲ為シ。金鏈臂環頸帶ニハ真珠及ヒ金剛石ヲ装シ。頭上ニ金冠ヲ戴ク。金棺内ニ在テ祈念スルキノ如キ快ヲ為シ。拵指ヲ延一合掌ニ顯ヲ尺ニ向テ。是ニ於テ王族ノ男女暹

羅官吏皆家族ヲ伴テ来リ。詣シ哀悼ノ容ヲ精白麻布ノ衣服ヲ着シ。敢テ貴價品ヲ用ヒス。左右滿手ノ花及ヒ一二ノ香料ヲ屍体ニ撒シ。此ノ如クスルノ後金棺及ヒ屍体ヲ高阜ニ後シ。盛飾アル車ニ載セ。最貴ノ候及女候ニ示ス。此時女候ハ各々之ヲ持テ近接シ手ヲ摺リ屢泣蹄シ。死者ノ名ヲ唱テ凡ソ喪ニ属スル諸物ヲ供ス。並シ氏盛車ハ貴人ノ之ヲ引テ徐々ニ上ノ五塔ニ近接ス。屍前ニハ王ノ長子死シタル女ノ血族象ニ騎ル。双方ニ近兄弟アリ。其象ハ白布ヲ纏ノ各人柩ニ掛



クルノ長キ襜ノ如キ者ノ端ヲ手ニ持ス。此外十  
四人ノ兄弟ハ步行シテ棺ノ兩側ニ隨從シ身ニ  
同一ノ白布ヲ着シ手ニ炬火ヲ執ル。車後ニ貴公  
貴妃狹行ス。此他ニ美麗ナル衣服ヲ着ニタル者  
數人凡ノ相隔ルヲ二十尋ノ所ニテ人民ニ衣服  
或ハ果實内ニテコル又マリスヲ納レタル者ヲ  
投與ス。テコルハ暹羅ノ銀貨ニテギユルヨリ  
ハ稍大ナリ。マリスハギユルデレノ四分ノ一ナ  
リ。之ヲ争ヒ拾ハレトシテ衆人雜沓蹂躪シテ相  
壓死スルニ至リ。テアリ。然レ盛車既ニ五塔中

五塔中

ノ一大塔内ニ入レハ重職ノ官吏之ヲ荷ノテ大  
ニ敬礼ノ式アリテ悲哀スヘキ歌曲ヲ奏シ笛鐘  
鼓及ヒ他ノ樂器ヲ合奏シ棺ヲ石臺上ニ置キ周  
圍ニ香木ヲ薫シ香水ヲ撒布ス。是ニ於テ各王子  
及ヒ諸官吏退去シ唯侍女ノニ残り笛マリ棺傍  
ニ在リ。テ二日夜一歩モ其所ヲ去ラス。惆悵シテ  
往事ヲ說話ニ限リテ愁歎ノ態ヲ為ス。若シ之  
ヲ等閑ニスル者アリテ敬事ノ容ヲ失スレハ誰  
彼ノ別ナク之ヲ司トル全權ノ一婦人アリテ索  
ヲ以テ其人ヲ縛スルナリ。此五塔ノ傍ニ一假舎



ヲ設金絨ニ油ヲ塗リタル者ヲ以テ之ヲ蓋ノ暹  
 羅大僧官着坐ニ死者ノ為ニ誦經ニ或ハ一時之  
 ツ出テ衆人ニ多数ノ衣服壺鍋金臥床煙具及ヒ  
 其他百般ノ家財又藥工用具鑿鋸錐等ノ類ニ至  
 ルマテテ施典ス此外更ニ下等ノ假舎アリ下等  
 ノ僧侶数千人ニ及ヒ是亦不断誦經ニ或ハ施典  
 ノ一ニ関ス五塔ノ周圍ニ二十所ノ他塔アリ之  
 ヲリ日没後奇巧ナル煙火ヲ放ツ一十四日間ナ  
 リ二月二十五日即チ葬送後國王ハ再ヒ前日ノ如ク  
 盛狂ニテ其場ニ到リ象ヲ下リテ炬ニ火ヲ移シ

ラ之ヲ積薪ニ和リ湏臾ニニテ塔中火焰上昇シ  
 壺ニ櫃ノ之ヲ焼クニアラヌ種々高價ナル物品  
 ヲ金函ニ入レタルヲモ共ニ灰燼ト為スナリ漸  
 ク火ノ減スルニ國王速カニ自ラ此處ニ来リ蕩  
 燼ノ金塊又焼残リノ木端等ヲ除キ其下ニアル  
 膏灰ヲ拵出シ骨ハ一壺ニ納ム此時偶見ル死肉  
 焼ケ残リテ血ノ流レガルノミナルヲ王大ニ驚  
 キ此所ニ會セシ議官オヤガバルテイバシヲ呼  
 ビ問テ曰ク今膏ヲ拾フニ方テ女ノ死ノ焼ケス  
 レテ其肉血ノ出ル如キモノヲ見ル如何ニテ此



ノ如キモノナリヤ。然レ所以ヲ告ケ。甘バルテ  
イバレ。謹テ答テ曰ク。目下斯クノ如キ確證アリシ  
ハ。議論スルヲ用フル。ナク。大権陛下。直ニ。恩  
惟スヘシト。時ニ國王色ヲ変ニ。直ニ。外ニ。出ラ  
衆ニ。向テ。曰ク。常ニ。疑テ。所アリ。今其。驗証ヲ。得タ  
リ。七女ハ。毒殺ニ。達シタル。極マシリト。王女ノ。生  
中常ニ。給仕シタル。侍女等ヲ。一人モ。漏カス。總テ  
警察セリ。

二月二十八日ニ至リ。此件。驗擾ヲ。極メ。侍女三百  
人。死ニ。王女ノ。傳タル者。又。平日。王女ノ。傍ニ。往來  
シタル。高貴ノ。人。迄。モ。悉ク。暹羅國。一般ノ。習慣ニ。  
倣ヒ。烈大ヲ。踏ミ。テ。無罪ヲ。證スル。一ニ。極レリ。此  
火ヲ。踏ミ。渡ル。ニ。燒傷スル者ハ。罪科アリト。傷  
セカル者ハ。無罪ト。ニ。疑念ヲ。容レカルト。リ。此。誠  
證ニ。方リ。他人ハ。皆。疑テ。ヘキナク。唯。前王ノ。末女  
ノ。ニ。燒傷ヲ。蒙リ。テ。具テ。用ヒタルヲ。見ル。  
是ハ。一。事故アリ。如何ト。尋ヌル。ニ。國王ハ。此女ヲ  
以テ。曾テ。妾ト。為ス。蓋ニ。前王ノ。女ナレ。氏。今ハ。王  
位ヲ。脱シ。臣下ノ。列ニ。加ハルヲ。以テ。然ルナリ。又  
今王ノ。嫡女ハ。其性。弱質ニ。シテ。前王ノ。末女ノ。此



踏火ノ檢ニ逢リテ憐ニ其足ヲ傷レテテ怨レ又  
王へ請願シテ斯クノ如ク計リシナリ前王ノ女  
モ踏火セリルヲ得ス故ニ其侍女ト共ニ爰ニ来  
リ憶ヌル色ナク踏ミタリニニ他人ハ恙ナク唯  
此女ノニ兩足ヲ焼傷セリ王之ヲ見テ怒テ令ニ  
テ銀鎖ヲ以テ其女ヲ縛ニ其傍ニ人ノ至ルヲ禁  
ニ己レノ愛女ヲ害シタル者トナシ詰問モ加ヘ  
ス之ヲ長生セシムルハ却テ世ノ害ヲ為ス者ト  
ニ速クニ斬首セシトス此時前王ノ女ハ切ニ請  
フニ曰ク我父ナル前王在世ノ時妾ノ習熟セシ

垂

絳聲一曲ヲ奏セシ事是生前ノ願ナリ君王情ア  
テハ此事ヲ許サレヘシト數回哀訴セシニ國王  
之ヲ聽テ曰ク汝實ヲ掩ハス陳述スルナラハ  
其願意ヲ許サレト此言ヲ聞テ前王ノ女曰ク呪  
詛ヲセシ毒菜ヲ食物ニ混和セシヲ食スレハ其  
人死シテ後火ニ焼クモ心ヲス内内ニ焼ケサレ  
所アリ故ニ此毒ヲ王ニ用ヒ王族ヲ滅シ我カ恨  
ヲ報スヘシ國王假令其身ヲ厚ク保護スルモ其  
隙ヲ伺我カ遺言ヲ遂ケヨト妾ノ父王ノ嚴命ア  
ルヲ以テ之ヲ奉セシニ豈ニ計ラレヤ徒勞トナ



リ却テ王女ヲ害スルニ至ルヲト其言未タ畢ラ  
カレニ王ハ勃然ト怒リ直クニカヲ把テ汝ノ身  
肉ヲ截リ之ヲ食フヘニト罵リケレハ王女ハ號  
哭ニテ詞ヲ發セス王ハ刀ヲ上ケ前王ノ女ヲ殺  
害シテ竟ニ之ヲ寸断シ慘酷ヲ極メ而シテユヅリ  
河水中ニ棄テシメタリ

前王ノ男子則チ此ノ女ノ才モ遂ニ殺害セラレ  
タリ是ヲ以テ之ヲ觀レハ今王ハ前王ノ位ヲ奪  
ヒタルヲ顯然タリ若シ此男女ノ害ニ逢ハスレ  
テ其計ヲ成就スルヲ得ハ王業ハ舊ニ復シ此

有像

ノ前王ノ才ニ歸リ可カリレタリ哀情ニ堪ヘカ  
ル哉此送葬ヨリ後ノ事盡ク畢リタル後國王ハ  
大所ニ於テ蕩然シタル金塊及ヒ祭奠トシテ衆  
人ヨリ贈寄スルノ金銀花々王女カ存生中野高  
セニ苦テノ金ヲ悉ク費用トシテ王女ノ像ヲ  
模造セシメ之ヲ衆人ニ拜セシメリカ為ニ寺院  
ニ安置シタルナリ斯クノ如キ暹羅國人ノ像ヲ  
憐ノ寺ニ模シ有像トナシ置クヲ見タリ  
ワリゲナール憐ヲ通過シ三月十七日大阪ニ着  
セリ此地其頃暴風アリタルカ為ニ田畝ヲ害シ



樹木ヲ倒シ諸物價格外ニ騰貴シ。隨テ陸運雇夫ノ賃錢モ平日ヨリ上ケタレ氏ワリゲナリハ榜葛刺國産ノ兎牛ニ頭ト是ニ附屬ノカ川草等ヲ載セタル車ヲ町奉行集人様ト丹波様ニ請ヒ之ニ需要スル夫卒三十人ヲ相當ノ料ニテ雇ノヘキ約定書ヲ得テ日々之ヲ支辨セントス。但シワリゲナリ陸行準備ノ為ニ大阪ニ逗留スル一五日偶京都ヨリ報アリ浴中火ヲ失シ四十所焼失シ焼死スル者セカラスト。

山城ノ一小駅ナリ大阪ヲ距ル一八里。迄ハ日本ノ一有名地ナリ建築精巧ナル寺院及ヒ立派ナル家屋アリテ高キ一塔ノ如シ窓ニハ透明ナル障子ヲ閉ツ各室撤金ノ襖アリ之ヲ閉ツレハ壁ノ如ク大小意ニ應ヒテ閉閉スヘシ四壁ニハ金絨ヲ張り山水花鳥ヲ画ク。奥壁ニ画幅ヲ掛ケ瓶ニ花ヲ挿セタリ此等ノ快ハ日本全國皆然リ。迄ニ城アリ石壁深濠ヨリ策市中ニ立派ナル邸第アリ其橋高ニ極テ遠所ヨリ望ニ見ルヘシ陸地一方ハ森林アリ林中ニ鹿及ヒ野豚多シ一方

○



ハ美ナル田畝ナリ米及ヒ諸般ノ蔬菜ヲ多産ス  
 白鳥鵝鴨鶩鶴雉子旭鷄鷄及ヒ諸種ノ鳥類アリ  
 一他地ニ勝ル又川ニハパールスホーレシ魚  
 及ヒ非常ニ美味ナル鱒ヲ産ス此魚ハ大洋ヨリ  
 流ニ溯リタルナリ但ニ大阪ニテ得ルヨリハ淀  
 ニテ得ルヲ佳品トス尤モ驚クヘキハ鱒魚此地  
 ニ至レハ活潑ニシテ其心ヲ截ルモ尚保生スル  
 一數時ナリ而シテ其心ハ一日夜尚保生ス此鱒魚  
 ハ極テ美味ナシ共頭ニハ大毒アリ鱒魚ノ頭ヲ  
 多食スレハ忽チ熱ヲ發スルナリ

ワ一ゲナール三月二十一日京都ニ着ス直クニ  
 所司代牧野佐渡様ニ報知ス江戸ニ至ルノ旅券  
 ナリ請テ直クニ京都ヲ辞シ十三日ニテ江戸ニ着  
 ス此行ヤ寒冷且ツ多雨ナルカ為ニ他時ヨリハ  
 大ニ進歩ヲ困難且ツ遅延セシメリ將軍ニ謁見  
 スルノ定朔ヲ過キタルヲ以テ謁見ヲ賜フノ前  
 ニ多日ヲ消費セリ聞カ如キハ升上筑後殿老年  
 ニ及ヒタルヲ以テ前年ニ於テ職ヲ辭ニタリト  
 則チ將軍ハ北條安房守様ヲ以テ之ニ代リ並シ  
 氏ワ一ゲナール尚舊例ニ據テ筑後殿ニ進上物



目錄ヲ呈シ。適宜配當ヲ請ハレト欲セリ。並シニ  
詠官ハ之ヲ筑後殿ニ送ラス。長寄奉行共兵  
衛様ニ送レリ。此人目錄ヲ熟覽シテ。各家分配ヲ  
定メリ。唯將軍献上品中。更ニ黒色羅紗ニ卷ヲ添  
加セシメレハ。欲スワーゲテリ之ニ抗シテ曰  
ク。献上品既ニ備ハレテ。又從來將軍ニ献上ル所  
此ノ如ク高價ニ至リタルヲテシト。然レ兵衛共  
衛様前詠ヲ固執スルヲ以テワーゲテリ終ニ  
意ヲ曲シ。黒色羅紗ヲ添ヘサレテ得サリシ。彼又  
曰ク。筑後殿假令職ヲ辨スルモ。今俄カニ舊例ヲ  
廢ス可ラス。抑モ此人ハ蘭人ノ為ニ常ニ非常ニ  
配慮ニタレハナリワーゲテリ詠官ニ命シテ  
再ニ前記ノ目錄ヲ筑後殿ニ捧ケシム。然レ之ヲ  
後殿目錄ヲ見ス。之ヲ返附シテ寧ニ述テ曰  
ク。自後決シテ此ノ如キ進物ヲ寄スルヲ勿レ。唯  
其舊誼ヲ失ハカレテ感謝スト。筑後殿ノ代役北  
條安房守ハ蘭人ノ為ニ周旋スルヲ欲セス。故ニ  
諸事ヲ執。且テ苛酷ナル兵衛様ニ委任セリ。  
ワーゲテリ献上品ヲ貯フルニ大ニ困苦セリ。  
蓋シ蘭人ノ旅舎ハ。燒後尚僅カニ假役スル所ナ



ルヲ以テ葉筵ニテ被テノミニテハ小舎ニ異テ  
ラス蓋シ江ノ中諸家都テ此ノ如シ大都府タル  
ノ物ニ似ス蘭人旅舎後ノ避災庫ニ爲有ニ歸セ  
リ兵衛様ワゲナールニニ屋舖ノ一室ヲ  
貸シ兵衛ノ將軍献上品ヲ備一シノハセリワ  
ゲナールハ其運搬ニ雜費ヲ消スヘキヲ以テ之  
ヲ好マカシ氏尚其命ニ戻ルヲ得ス則チ貨物ヲ  
更ニ包捆シテ其方ニ送リ然ルニ孰改ヨリ未ル  
二十八日<sup>之ヲ稱ス</sup>我四月十九日ニ方ル將軍ノ諸  
候ニ謁スルノ日タルヲ以テ蘭使ニモ謁見ヲ賜

フト兵衛様ヨリ二日前ニ此事ヲ報知シ本日  
朝九時ニ盛服ニテ全從者ヲ伴テ登城ニ献上  
品ヲ披露スヘト命セリ傍葛刺兎牛ヲ牽クカ故  
ニ日々觀者數千人蘭人旅舎前ニ群集雜沓ニ殆  
レト通行ヲ妨クルニ至ル此雜沓ヲ避クル為ニ  
夜中兎牛ヲ引キ出レカルト共ニ日出前ニ詔官ヲ  
シテ先ヲ城内ニ至リワゲナールノ定時ニ登  
城スルヲ待タレムワゲナール西城ニ至リ待  
ツトニ時西城ノ西ニアリ大城ハ二年前ニ燒失  
シタルヲ以テ將軍當時西城ニ住スルナリ兵



衛様ハ平常ノ番所ニアリテゲナールヲ誘テ  
立派ナル廊下ヲ過キ將軍ノ座所正面ニ出テ將  
軍ハ敵上呂ヲ通覽シ顔ヲ此ニ接ニテ拝伏スル  
ノワレダナールヨリハ就中榜葛刺兎牛ニ目ヲ  
注ク此ノ如クスルヲ久シカラスレテ命セラレ  
テ復ニ番所ニ退出セリ此時一貴人來リ執政ノ  
命ニテニ蘭人ヲ前廷ニ誘テ執政ニ向テ比將軍  
兎牛ノ所置車ニ駕スル法粧飾ヲ附スル法及ヒ  
之ヲ逐ヒ行クノ状等ヲ説諭ス將軍大ニ之ヲ賞  
翫シ日々之ヲ見ルト云ノ此ノ如クスルニ二時

ヲ消セリ既ニメワレゲナールニ退去ヲ命セリ  
與兵衛様此事ヲ通シタル以テワレゲナールハ  
將軍ニ謁見ヲ得タルノ榮ヲ厚謝ス翌日他ノ進  
物ヲ定例ニ倣テ執政江戸所奉行及ヒ他ノ貴人  
ニ寄贈セリ各家皆丁寧ニ侍臣ヲシテ謝辭ヲ述  
ヘシメタシ比敢テ一人モ為ニ自テ相接見スル  
者ナシ與兵衛様又曰ク將軍本年井上河内様及  
ニ板倉阿波様ヲ執政ニ奉タルヲ以テ此二家ニ  
モ亦進物ヲ呈スヘレト本年進物ノ總計一万一  
千五百七十六ギエルゲンハストイールセベレシグナリ然レ比旅費

江ノ夫費



ハ更ニ巨額ナリ。則チ一万六千九百九十ハストイ  
ナルトベレニレグニホリ。

今回ノ旅行ハ極テ多額ヲ消セリ。然ル所以ハ許  
多ノ不幸アリタレハナリ。壺ニ怒浪逆風ノ為ニ  
航路非常ニ遅延シタルノミナラス更ニ陸路モ  
天氣多雨ナシハナリ。如之江戸ニテハ燒後物價  
騰貴シ。滞留三十日間ニ巨額ヲ消セリ。又ニ執政  
新任アリテ進物ヲ増加セリ。又其献残品ヲ長寄  
ニ携一歸ルヘシト。奥兵衛様ヨリ命セリ。蓋シ江  
戸ニテ賣ルハ不都合ナリ。何トナシハ日本貴人

日本貴人傳

中ニ於テ甲乙相競テ懇望スルヲ得ルニ得ル  
者ハ之ヲ誇張シ得ル者ハ失望スルニ至リ。故  
ニ今後ハ蘭人長寄ニテ適宜ノ進物ノ議定シ  
決シテ餘分ノ貨物ヲ江戸ニ送ルヲ勿レト。然レ  
此ワ一ゲナリ。奥兵衛様ニ告テ曰ク。数年前ニ  
定例献上品ノ外更ニ他ノ賣品ヲモ輸ニ来ルヘ  
シト命ヲ得タリ。是ニハ新任ノ諸君ニ呈スヘ  
キニ供シ一ニハ貴権ノ人之ヲ好ム。貨弊ヨリ  
モ甚タシケレハナリト。奥兵衛様此言ヲ聽テ之  
ヲ可トシワ一ゲナリ。許シテ残品ヲ賣ラレ







者ナリ。他ノ貴人中家世殿ハ貨物ヲ購求セント  
 欲ス。ワレゲナリルニ附屬ノ訟官ハ其代價ヲ請  
 求ス。シテ艱難。蓋シ貴權人ヲ負債者ト為ス。不  
 適ナリトス。シハナリ。然レハワレゲナリル宋女  
 殿ニ即日償却ヲ約スル代價書附テ送リタシハ  
 之ヲ領承セリ。然レハ其家臣ハ其主君ノ帰國ニ  
 タルヲ以テ期ヲ緩ニセシ。ノ請フ。此時將軍ヨ  
 リ蘭使旅舎ニ答礼ヲ賜リ。殿中ヨリ送ル所。舎ニ  
 在テ請取ルヘシト。四月二十九日ワレゲナリル  
 登城ニ番所ニ在テ待ワレ大畧一時許。此條安房  
 守ハ筑後殿ノ跡役ナリ。非常ニ立派ナル席ニ誘  
 フ。四執政ヲ隔ワレ大畧二十歩ニ坐セシム。其後  
 ニ各種ノ貴人アリ。安房様訟官喜五衛門ヲシテ  
 將軍及ニ執政ノ名ニテ。後件ヲ述フ。若蘭人カス  
 ナリ。アリ。ネレノマニル。ヨリ。或ハ葡人ノ卧亞  
 ヲリ。日本ニ向テ攻メ来リ。トスルヲ知ル。ア  
 ラハ速カニ之ヲ長崎奉行ニ報告セヨ。我防護ノ  
 策ヲ回ラスヘキナリ。此言アル以テ將軍ノ仁惠  
 ヲ深カラシムヘシ。此恩アルヲ以テ日本ニ自由  
 貿易ヲ許スナリ。安房殿又曰ク。蘭人向後日本ニ



貿易スルノ支那船ヲ海上ニテ之ヲ逐ク之ヲ掠  
 ヲ之ヲ取押ユルヲ注意スヘシ將軍ハ漂搖ノ  
 船ヲ救フノ術ニ拙シ若シ海賊止マシムルハ阿  
 蘭人ニテ打リヘシ將軍ハ決シテ支那人ノ隣國  
 ニ通商スルヲ妨クル者ヲ許サズ  
 ワーゲナール安房殿ニ答テ曰ク蘭人ハ大ニ日  
 本國ノ為ニ注意スル所アリ故ニ勉テカラ盡シ  
 テ日本ヲ保護セムトスカスケリアリシ或ハ葡  
 人不軌ヲ謀ルヲ悟ルヲテハ速カニ長寄ニ教知  
 スヘシ支那船ヲ掠奪シタルハ無法ナル海賊ノ  
 所為ナルノミ決シテ伯蒂比亞高官ノ関カリ知  
 ル所ニアラス故ニ速カニ之ヲ刑ニ處シ他ノ懲  
 戒トシテ自後絶テ此事無クシメントセリ

日本執政ハ此説ヲ聞テ大ニ満足スルニ似タリ  
 次テ非常ニ立派ナル時服三十ヲ三板臺ニ載  
 セ之ヲ持来シリ安房殿再ヒ曰ク蘭使ヨ汝ノ敵  
 上呂大ニ將軍ノ満悦スル所タリ故ニ今其答礼  
 トシテ之ヲ贈ル且ツ長寄旅行ヲ祝スワーゲナ  
 ール典兵衛様ニ導カレ速カニ拜謁ヲ問ヒ併ニ  
 將軍ヨリ恩賜アリタルヲ賀セラル典兵衛様ハ



執政ニ就テ旅行須要諸件ヲ請求セリ  
其他尾張候紀伊候及ヒ水戸候共ニ將軍美濃様ヨリ血色珊瑚及ヒ琥珀鐘ノ註文アリ紀伊候ハ更ニ六品ノ所望アリ其形状ヲ紙ニ寫シワリゲナールニ午渡シセリ美濃様ニ望遠鏡ヲ贈リタルニ匹ナレタリ曰ク硝子透明ナラスト然レモ察スルニ是侍臣等之ヲ取扱フニ粗暴ニシテ機関ヲ損傷シタルナルヘシ又レハベルキユスドドノウリスノ結構ナル本草書ニ亦然リ曰ク花木及ヒ草葉真ニ魚ルモ細小ニ見分ルニ苦シム

ヲ以テ適意ナリトセス請フ更ニ大ニ精ナル者ヲ得ント又將軍ヨリアムステルダニ註文ニタル天球地球兩儀ハ用法ヲ解セオルフ以テ意ニ適セストス曰ク此地球儀歐羅巴ノ有名王國ヲモ指示シ得ス又天球儀ニ就テハ天ノ里形ノ微候ヲ尤モ意表ニ出ルトニ或ハ此ノ如キ人孰豈存スルアヤレヤ或ハ存スルヲヲルモ雲間ニ於テ焉ナ之ヲ見レテ得レヤト或ハ曰ク此物果ノ天ニ位スルナルヘシト  
ワトゲナール江アニ遷留スルヲ三十日ニメ五月



四日。都府ヲ出立シ。十四日。三ヲ京都ヲ過キ。安全  
ニ大阪ニ着セリ。同月二十日。是ヨリ乗船出帆セ  
リ。風向及ヒ天氣適好ニテ。大阪ヲ發スルノ早八  
日ニ下ノ関ニ投錨セリ。詎官及ヒ奉行舟士ニ令  
シテ豊後ト日本岸トノ間ヲ經過シ。高麗海ニ出  
ルヲ禁セリ。定風期既ニ過キタルヲ以テ。久シク  
海上ニ風待ヲ為セリ。但シ連日逆風ナルヲ以テ  
進行スルヲ得ス。蘭人ハ執政ノ思考也。如ク小  
倉ヨリ陸路長寄ニ赴カレ。テ望メリ。蓋ニ確然  
タルヲ以テ。不確然ニ代レトスルナリ。愈可ヲ  
決セハ之ニ從事セリトス。

然ルニワリゲナール困難トスル所アリ。此ノ如  
キ新案ヲ起スニ方テハ。又新難アリ。テ多費ヲ要  
スルナリ。憶ニ豊後ヲ經過シテ陸行スルヨリ。常  
例ノ如ク航行スレハ巨額ノ雜費ヲ省クハナリ。  
是ニ於テワリゲナールハ。詎官及ヒ奉行ノ議ヲ  
取ラス。彼輩尚前説ヲ固執ニテ。自意ニ任セテ陸  
行セント決シ。下ノ関ヨリ之ニ斜對スルノ豊後  
小倉ニ達ス。則チ上陸ス。ワリゲナールハ之ヲ好  
ナシテ。強ク其意ニ任セテ。カレヲ得ス。



此旅行中又危険ヲ冒セリ。水勢劇シク岩石ニ激  
スルカ故ニ歩行渉リセザルヲ得ス。岸歎テ凶深  
キ以テ。一步々意ヲ用ヒザルヲ得ス。此ク如ク  
危険ノ外更ニ不幸アリ。豊後又曰國小倉ヨリ長寄  
ニ至ルハ大ニ貧困ナリ。其快食物ニテ知ルヘシ  
ワ―ゲナール全五日ヲ経テ山家ノ岬及ヒアシ  
ルヲ右側ニ見ル。更ニ進テ博多及ヒ肥前ヲ過ク  
連兩ノ為ニ汚道泥濘ナリ。

肥前ニ至テ始テ休息スルヲ得タリ。爰ニハ食物  
沢山ナリ。殊ニ鱒ニ異ナラザル美味魚ヲ食セリ。  
是臺河ニテ捕リ所ナリト云フ。此所ハ臺河城ニ  
漑クナリ。此城ハ大ニ現着ナリ。城主中流ニ一偃  
息所ヲ設ケ枕上ニ策ク所ナリ。急流其下ヲ過ク  
上ニ教室アリ。四方開豁ナリ。屋根ハ金甍ニテ輝  
ク。其下ニ遊船ヲ繫ク。日光及ヒ雨湿ヲ拒ク。臺河  
城ノ外構ハ税官ノ住居ニ達ス。

税関ニハ上下ノ船舶及ヒ四國ノ人民ヨリ税ヲ  
納ム。此外郭ヲ護ル人ノ職務ハ日夜看護ニテ。或  
人ハ轎ニテ。或人ハ馬上ニテ。或人ハ荷物ヲ負擔  
シ。或人ハ牛車ヲ牽テ通道スルヲ一時モ怠ラス。



注視ス。此外郭ト臺河トノ間ニ一廣地アリ。祝園ニ到ルノ荷物ヲ扱スルニ供ス。外郭ニ三門アリ。其大ナル者ハ通街ニ向テ一屋根アリ。兩壁間ニ二扉アリ。愈進テ門ニ入ル。兩側ニ壁ヲ築ク。棟木ハ稍球壁上ニ挺出ス。球壁ニハ数裂アリ。其ノ末尖ニ四角ナル蕃所アリ。二層ニテ高シ。其内ニ数房アリ。祝官焉ニ住ス。此外郭ヨリ一道アリ。城後ノ山ニ向テ其厚サ壁ニ減セス。其屋根ノ外貌王居ニ異テラス。立派ナル門四所アリ。更ニ大ニ高キ六橋アリ。内五ハ五層ナリ。第六橋ハ他ニ過キ

臺灣後漢書

更ニ數層ナリ。内外ノ粧飾花麗人目ヲ眩ス。中道ハ山ノ半腹ニアリ。城ハ外郭トノ間ナリ。現著ナル寺アリ。坊主日々佛事ヲ營ム。肥前ノ所ハ多分ハ城ト山トノ後ニアリテ長ニテ户数殆レト二万ニ近シ。寺院及ヒ橋突起ス。ワリゲナリル大村領ヲ過テアラハ田原アエノウシ牛ノ首ヲモダキセツ山瀨戸及ヒ福田ヲ右ニ見。七月二日長寄ニ着セリ。臺灣ヨリ一倍ヲ得タリ。鞆鞆ト國姓爺トノ貿易和平ニ帰セリ。故ニ南臺灣舟山島ニ在留シ文誼ヲ厚クセントスト。又



臺灣ヨリノ別信ニ支那訖官コベロカビレギエ  
テ私ルニ國姓爺ノ名ニテ舟稅ヲ取臺灣ニテ貿  
易ヲ為ニタリ此秘事露見ニ為ニ入牢セリ後輕  
罰ニテ放免セテシタリ則チ妻子ヲ携テ支那ニ  
遁走セリ國姓爺ハアレテ内ニテ稅官ニ任セ  
リ茲ニ疑モテク東印土ノ為ニハ大益勿ルヘシ  
上ノビレギエアハ臺灣ニ七万レアーレレ以上  
ノ負債ヲ存セリ

フーゲナールハ十月一日マデチズワルテビエ  
ル船ノ多價ヲ載セ到ルヲ待チタシ氏高未ダ到ラ

ナルヲ以テ東京絹歐羅巴織物羅紗ヲスセシム  
ルベクユアノネン及ヒ暹羅ペルテレシラ開  
高セナルヲ得ス且ツ書記ニテ約スデビエ  
ルノ荷物出島ニ着セハ来年迄貯フヘシ此船ノ遲滯  
スルカ為ニ他時日本ヨリ得ルノ比例ヨリハ此  
時マテニ金八噸ヲ賦セリ

高事ノ快左ノ如シ十月東印土商會自由開商ノ  
許可ヲ得タリ月曜日ハ縱覽日ナリ此時長寄出  
島ノ倉庫ヲ開ク廊下ノ中道ニ長大臺ヲ列ニ其  
下三百區ヲ分ツ上層ニハ東印土商會ノ奴僕住



ス臺上ニ銀盃ヲ置キ之ニ諸賣品ヲ納ル則チ乾  
 菜胡椒丁子肉豆蔻弗利桂又及ヒ鹿角羊皮水牛  
 皮又東京ベリリング麝香歐羅巴織物羅紗ラス  
 セシ鏡檀木水銀琥珀及ヒフーデシ等ナリ日本  
 人夥シク群来ス夜中諸庫ニハ將軍家ノ番卒長  
 寄紳士立合ニテ封印ス此紳士ハ商事ノ間蘭商  
 ト共ニ第一食膳ニ就クナリ更ニ日本人三百名  
 ヲ雇フ是日々東印土商會ヨリ給料ヲ取勞使セ  
 ラルナリ最ナル廊下ハ四角ナル場所ナリサツ  
 ベレ木ノ鉋カケメル柱ニ安ス長ナリ十二尺階級  
 アリテ上層ニ上ル床ニハ立派ナル絨殿ヲ敷ク  
 周圍ニ椅子ヲ列ス其絹縵ハ東印土商會ノ記章  
 ヲ現ス日本人廊下ニ入り来ルハ履ヲ脱ス大曜  
 日相貿易ス日々之ヲ賣リ渡ス此時蘭庫ノ水門  
 ヲ開テ月中ハ荷物揚々卸シテラ消費ス百芭以  
 上ニ及フ日曜日ニハ商業ヲ休ミ阿蘭人信心  
 ヲ祈ル為ナリ但シ舟行ヲ許カス此月ハ猶出島  
 ノ年市ノ如シ日本人出店シテ販ク所銅銀土苳  
 苓樟腦樟木陶器絹日本服表ハ金銀ヲ縫箔ニ内  
 ニ綿ヲ充ツ米銀器煙草漆器ナリ此ノ如ク貨物



ヲ掛列シテ飲酒ニテ相飲ノ酒トハ美白小麦ヨリ醸成スル所ニテ飲カヘキ臭氣アリ然シ氏其強忍ナルヲ西班牙酒ノ如シ上ニ記スル紳士ハ此貿易ノ保証人ナリ銀及ヒ銅ハ料量ニテ櫃ニ納ム將軍ノ極仰ヲ記ス東印土商社貨物ノ賣捌代價銀六百櫃銅二千櫃ナリ或ハ之ヨリ増減出入アリ毎銀櫃ハ和蘭千レークスダールゲルコト

下ル  
ワーゲヤールルホーゲレカニクガ船ニテ出帆ス但ニ豫期ヨリハ一月ヲ短縮セリ此理由ハ臺灣ノ土

マニラ

四三

人マルテーションレメイ臺灣ノ外科醫トナリテニ  
一ウボートルト船ニテ長崎ニ着岸ニ出島和蘭倉庫ノ後ニ居留スル一ヲ許カレタリ三商人ノ補助ニ依ル然レニ十月十三日朝此人踪迹ヲ失儀其幕上ニ一書ヲ遺スヲ見出スヲ得タリ曰ク自ラ死ヲ決スト蓋ニ日本一妓ニ親シニ三日留連終ニ之ニ至リテリワーゲヤールル此人ノ生死ニ拘ラス之ヲ探索スルニ勞カスレ氏知テ是ニ於テ此事ヲ所奉行ニ執ス所奉行急ニ令ヲ傳テ許多奉行認官及ヒ自家ノ奴僕ヲレテ各家各



屋ヲ探索シ更ニ諸船舶及ニ日本船ニ及リ全長  
寄布ノ内外大ニ騷擾セリワーゲナール出島周  
圍ヲ搜索スルニ終ニシメテ見出カルヲ以テ  
大ニ困却ス何トヤレハ奉行ハ邪推シテ是葡僧  
ニテ支那ヨリ来リ竊カニ未タ發覺セザルヤリ  
スト徒ニ身ヲ托スルヤルヘルト然ルニ十月十  
五日夜シメイ縛セラレテ出島ニ送ラレタルヲ  
以テ疑念氷解セリ殊ニ此人遁逃シタル片當直  
ノ番卒ハ省護不注意ナリトテ大ニ懲戒セラレ  
タリ此メレイハ夜中竊リテ柵ヲ越テ海水ニ乘  
シテ提東方ヨリ長寄ニ達シ是ニ於テ一大支那  
船ノ席帆下ニ隠レタリ然レニ饑渴ニ迫リタル  
ヲ以テ出現シテ彷徨シタル由リ忽チ捕縛セラ  
レテ所奉行ニ送ラレ吹テワーゲナールニ送致  
セリ一時之ヲ入牢セシメ後臺灣ニ送り相當ノ  
刑ニ處セシム  
所奉行ハ此時非常ニ氣色善カリシト見ユ何ト  
ナレハ平日ハ極テ嚴酷ノ性ナルカ故ニ和蘭船  
ヨリ遁走シタル者アル中ハ忽チニ之ヲ罰スレ  
ハナリ抑モ日本人ハ凡ソ来船アルニ一ニ帆



船長寄ニ接近スル者アリシハ官吏来テ先ツ舟中  
各人ノ姓名年數職務ヲ一々登録シ知年ノ者ヲ  
モ免カス後日其船帰帆スル片ニ方テ一人コシ  
氏失踪スル者アリシハ其人自殺スルカ或ハ出島  
紳士ノ許可ヲ得テ遺留スルヲ明白ナルニア  
リシハ其船及ヒ人ヲ奪テ大難ニ罹ルヤリ  
其後二年ニ又同一ノ件アリタリアミテ一ルホ  
ルレシホ一ヘシノ外科醫夜中船外ニ出テ支那  
船ニ泳キ好奇ノ念ヨリ支那ニ赴カレテ企テ  
夕リ舟士此事ヲイシテ一ニ報ス之ヨリ所奉  
行ニ教ス所奉行急ニ軍卒及ヒ自家ノ奴僕ヲ驅  
テ脱走人ヲ搜索セシム若シ之ヲ見出サレハ  
阿蘭船ヲ海上ニ引出シ貨物及ヒ人員ヲ併セテ  
共ニ焼棄シヘシトテ三日走人ヲ支那船内ニテ  
捕ヘ手足ヲ縛シ將軍ノ牢獄ニ入シ夕リ大金ヲ  
棄テ僅カニ一命ヲ放テテ得タリ終ニ之ヲ追放  
シ生涯復メ日本ニ到ル一勿テシメリ

スガウ一ヘラシテ船ノ一水支辭中誤ニ船扉ヲ  
閉ルノ將軍ノ封印ヲ毀傷セルアリ翌日該官及  
ヒ荷物ヲ運搬スル雇支等

此荷物銀櫃  
百五十磅ナリ

此封印ノ毀



傷ヲ見テ番船ノ奉行ニ報ス奉行再ニ封仰ヲ點  
檢之之ヲ所奉行ニ教通ス則チ忽チ兵卒二十人  
ヲ船内ニ送り若シ罪者ヲ搜シ得サレハ悉ク舟  
士ヲ入牢セシメントス然ルニ罪者ヲ發覺シ夕  
ルヲ以テ之ヲ所奉行ニ送り夕レハ左肩ヨリ右  
臂ニ一刀ニ截割セリ

此ノ如キ血刑ニハ心ヲスシモ創卒ヲ要セス貴  
人自ラ之ヲ行ク一アリ凡ソ新ニ一刀ヲ購求ス  
ル一アレハ其利鈍ヲ試ムル為ニ小見或ハ婦人  
或ハ男子犯罪ノ者ヲ斜斬スルナリ此類屢之

リ殊ニキリスト徒或ハ僧徒裁判所ニ於テ拷問  
スル時或ハ足ヲ掛ケ身ヲ倒シテ井中ニ墮シ血  
ヲ搾ル為ニ足ヲ井上ノ索ニ繫キ索傍ニテ一方  
ニハ火ヲ燒キ一方ハ吹流シテ飄ス此旗ハ夜  
ハ退ク晝ハ之ヲ出ス而シテ罪者死スルカ或ハ燒  
ルニ至ル更ニキリスト徒ノ近隣左右各三家共  
ニ死ニ處セラレ婦女ヲ見タリ氏敵ヲ許サズ多  
クハ左肩ヨリ右臂ニ向テ斜割スルナリ  
ワリゲテール伯蒂比亞ニ出帆スルノ準備ヲ為  
シ詭タル陶器ニ万五五百六十七個ヲ請取タリ是



ヨリ一ヶ月前ニモ出島ニテ多数ノ陶器ヲ求メ  
リ各店貯フル所夥ニテ知ルヘシ日本人ノ陶  
器ヲ製スルハ歲月多カラザルニ其術大ニ進歩  
セリ蘭人ノモテラス支那人モ夥シク日本陶器  
ヲ求ムルナリ諸地ニテ製スル所肥前製ヲ尤モ  
精巧ナリトス其土ハ他地ニ比スルハ更ニ白ニ  
メ更ニ密ナシハナリ日本人年々其術ニ精シク  
随テ製造愈巧ナリワールゲナール曾テ青地ニ小  
花アルヲ思ヒ白ク此ノ如キ者二百個ヲ誂タル  
ニ其人諸店ニテ取集メ即日持テ来リタルニ驚

ナタリ  
肥前ニテ精巧陶器ヲ製スルカ如ク支那ニシ  
クテシモ村アリ亦之ニ習ラス此地ハ地味瘦セ  
細砂精密ナリ南京ノ首府ヲイヘテ山ヨリ採  
取スル土ヲ掘キ交セテ陶器ヲ製スルナリ此土  
ハ他用ニ供スルナク帝家ノ記章ヲ附シ定價  
ニテシテテシモ村ニ賣リ渡スナリ此村ノニ  
ハ水中何等ノカアルニ依テテ精巧陶器ヲ製ス  
ルニ適スルナリ造陶工ハ固ヨリ愚昧ノ野人ノ  
ニ唯童年ヨリ之ニ從事ニ習熟自得スル所アル



下リ製法二様アリ。ホーイセウヨリ来ルノ土ヲ  
 以テ直クニ製スル。猶歐洲陶工ノ如キアリ。又  
 或ハ久シク貯ヘ置キ堅硬ナル。石ノ如クナル  
 ヲ待テ之ヲ搗キ碎キ水ヲ混ニ捏テ塊トシテ鑛  
 製ノ模型ニ入シ形ヲ為シ先ツ之ヲ風乾ニ後窯  
 ニ入ル十五日間烈火ヲテ焼キ其体ニテ放置ス  
 ル。十五日始テ之ヲ出スナリ。若シ未タ十分放  
 冷セナルニ方テ奔カニ風ニ中レハ忽チ粉碎ス  
 故ニ三十日ノ後窯ヲ閉クナリ。檢官アリ精密ニ  
 之ヲ檢シ制規ノ如ク製品五分ノ一ヲ官家ニ捧

中東(蘭)が  
 湖と出フ

他ハ又シユニ一ニ住人ニ賣ルナリ。是ホヤンノ  
 湖ノ一地ナリ。カン河ノ左岸ニアリ相距ル一  
 時行程。商業繁盛。家屋美麗ナリ。陶器商業年々繁  
 昌シ容易ニ之ヲ購ヒ難シ。此河ニハ支那小船常  
 ニ輻湊シ陶器ヲ輸出入スルナリ。是ニ由テ歐洲  
 ニ存ニタル舊説ノ誤ヲ知ルハ。曰ク陶器ヲ製  
 スルノ原質ハ搗キタル海草或ハ卵殻及ヒ土ニ  
 成ル。又租之ヲ土中ニ埋メ貯ノル。百年其年数  
 ノ多少ニ應ジテ子孫其價格ヲ論定スト。  
 ワーゲヤールヒルヘルワニ船ニ乗り長寄ヲ辞



○シ伯帯此處ニ赴キタリ○船内ニ裝砲○速クニ港  
ヲ出テタリ○甲板ノ荷物整頓スルヤ否ヤニ関  
セス○抑モ日本人ニハ一種ノ嚴則アリ○凡ソ蘭船  
内ニ既ニ軍器ヲ裝スレハ○晝夜ヲ論セス風雨ニ  
拘ラス速クニ海外ニ出ツヘキナリ○若シ暴風ノ  
為ニ僞山ニ達シ難キ所ハ○船ノ周圍ニ百艘以上  
ノ番船ヲ置キ砲ヲ揚ケ長寄港ヨリ引キ出サシ  
ム高麗海ニ九月ヨリ四月マテハ常ニ北定風ナ  
リ且ツ劇ニシテ檣帆ヲ張ルニ足ル  
ヒルヘルヲト此間ノ航行々々ナラハルニ危難ニ

アラセリ

過ヘリ夜プアセリ○海ニ入り○是東埔塞陸地  
ヲ距ルニ二十里ナリ一ノ長ク狭キ淺瀬ナリ長  
サ百里幅四十里○仰土人曰ク往時ハ一王國ナリ  
地震ノ為ニ沈没セリトプアセルノスノ西側ニ  
ニ淺所アリプルラエルスナレト及ヒアルヲ  
マイルト稱ス故ニ航行極テ危クシテ千六百六十  
年ニ一ノ多載船ナルガ一ス○船西班牙人導水者  
トナリテプアセルヲスニ向フタルナリナリ  
ゲアールハヒスカドリス諸島ヲ巡視シ見失フ  
タルジビエール船ヲ搜索セルト欲スレ氏天氣鬱



濛ニシテ堤迎接スルヲ得ナリシ

アールレキエシノ下ニ碇泊セシニ小船デゼイリ

ウデルヲ見タリ是大暴風ニ遇テ大ニ難澁セシ

者ナリ悉諸帆具ヲ失シ船ノ前部所房ハ激浪ノ

為ニ標揺セラレテ粉碎セリ商官ヘシキバロ

ニ及ヒ許多ノ水吏等皆活人ノ快ヤク骨骸ノ如

シバロシハ一身麻痺四肢震揺ス死體ノ如シワ

ーゲナール東京政府ニ書ヲ寄テ救助ヲ托シ伯

帯比亞ニ護送ヲラレテ懇請セリセイリワデ

ルノ舟吏等曰ク本年東京ニハ一異種ノ病流行

シ少時間ニ夥シク人ヲ損セリ凡ソ此病ニ罹シ

ハ健全ノ者卒然トメ顛旋シ忽チ地ニ倒シ失氣

昏冒數時ヲ出スレテ斃ル就中東京在留ノ阿蘭

主長ニコラスデエーグド亦為ニ死去セリト

東京病ハ英國ノ流行病ニ異ナラスヘレキナ

七世ノ時則チ千四百ハ十六年始テ英國ニ此病

行ハレ後四十二年ニシテ獨逸國ニ散蔓シ少時

間ニ無數ノ獨逸人ヲ急死セシメリ後冉ニ英國

ニ行ハレ倫敦ニ於テ最モ盛ナリ則チ千五百五

十年七日間ニ埋葬ニ從事スル人不足スルニ至

急病

四



レリ一家翁十二子ト共ニ無事ニ中食ニタル者  
夜食ニハ其妻ト侍者トノ外皆膳ヲ共ニセザル  
ニ至シル者アリ此病ニ罹シハ数時間ニ斃ル若  
シ幸ニメ其人獲汗スルヲ得ル者ハ徐々ニ回復  
ヲ得ルナリ

ワ一ゲナールセイワデルニ一ニ船中心須品  
ヲ分與ニテ進行セリ然レニバレカ岸ニテ行ヲ  
誤マリ不知ノ小島ニ着セリ滞留スル一ニ食時  
間僅カニ正路ヲ得タリグラセルリスレテ彼  
此ノ難事ニ遇タルハ舟支ノ失錯ニ由ルナリ蓋

シ各人其進路ノ方向ヲ異ニスルニ源ス加之急  
流ノ為ニ大漂流セリ本年則千六百五十九年十  
二月ワ一ゲナール伯帯比亜ニ投錨ニヘレデリ  
キインデーク及ヒエルレストヲハレホーゲレ  
ワ一ト共ニ上陸セリ

イレゾーキハ暫時伯帯比亜ニ逗留ニ速カニ日  
本ニ進行セリ出島ニアルヨアングラニオン  
ト交代セシカ為ナリボラセラレクハカルノド  
ガ一イハトルレ及ヒスグレーラト共ニ千六百六  
十年十月二十六日伯帯比亜ヲ出帆シ東仰土商



會ノ命ニテ日本ニ於テイロデーキ之ニ代ルナ  
リ。秘書記ニ右衛門殿及ヒ左之助殿ハ長寄奉行ノ  
名代ニテ大災防禦ノ一ニ任意ニ又蘭人名簿ヲ  
記セシハ出島ニ在留スル者十九人ナリ其内東  
印土商業ニ雇入シタル黒奴ノ外イロデーキノ  
子及ヒ女モ算セリ

秘書記及ヒ諸日本人ノ稱職位アル者ノ衣裳ハ  
極テ貴價ナリ頭ハ秃剃ニ周縁ニ短毛アリテ冠  
ノ如シ後頭ニ鬘アリ結束ス上衣ハ日本人コレ  
コルトト稱ス多色ナリ金彩散乱ス此濶キ上衣  
ハ胸前ニテ相開キ袖ヲ膝ニ及ヒ中身ニ濶帯ヲ  
纏リ金彩散乱ス帯間ニ双剣ヲ佩ク一長一短ナ  
リ鞆ニハ蔭繪アリ柄ハ長シ金糸ニテ巻ク上ニ  
記スル上衣ハ後ニ皺アリ背上帯前ニ長シ各家  
系統ヲ示スノ記章アリ帯下ニ固貼ニ見易ナリ  
ニム紋ハ四角ニテ貴價ニ縫着セリ衣中ニハ多  
ク綿ヲ盈テ上ノ帯ニテ結束ス袴ハ長ク濶ニ足  
後ニ摺ル其上ニ踏ニ行ク凡ソ職位アル人ハ女  
ナクモ三四人ノ從者ヲ伴ハサレハナシ其主公  
ハ柙柄ニテ掌中杖ヲ執テ進歩ス後ヨリ圓キ日



覆ヲ捧ケテ頭ヲ蓋フ一奴アリ肩上一棍ヲ荷  
リ其兩端ニ四角ナル漆塗ノ箱アリ一奴アリ履  
ヲ執リ一奴アリ前行ス此奴輩ハ短衣ヲ服ス中  
間綿ヲ盈ルノ帯ニテ束又大趾ト第二趾トの間  
ニ鼻緒ヲ挿シ紐ニテ足ニ結フ髪ヲ剃セス裸頭  
ヲモ髪ハ頭上ニ結束ス

蘭人埋葬

其後イレデーモハ死去セル商人アラレコイヌ  
レイニノルスワールトヲ埋葬スルノ許可ヲ得タ  
リ枢ヲ荷フテ長寄ヲ經過シ下商官訖官及ヒ他  
ノ東印土商會ノ奴僕之ヲ送り長寄港ノ前岸ノ

國姓爺臺灣ヲ  
整う信

山ニ至ル是尋常和蘭人ノ埋葬地ナリ此名和蘭商會アル出島ヲ支配スル小吏ヲ云フ報通ス丈那船ナリケリニ多貨ヲ載  
テ長寄ニ着岸セリ國姓爺ハ一時退去ノ後久シ  
カラスノ夥シキ軍卒ヲ懐シ有名ナル丈那將軍  
及ヒ諸官吏ヲ伴ヒ臺灣ニ進發セリ其内ニ其甥  
オウテアリ蓋ニ臺灣及ヒセイウレニア城ヲ東  
印土商會ノ手ヲ離シシメレカ為ナリ或ハ少ナ  
クモ平地ヲ占有セシメ為ナリ又丈那アミナ  
ルイナリ多額ノ商品ヲ載テ漂着セリ是海上慕  
風ニ遇テ悉ク帆具ヲ失シ僅カニ生命ヲ保スル



ナリ又東京ニハ目下惡病流行ニ卒然トノ頭旋  
失氣シ卒倒シテ命ヲ損ス者數千人ナリ更ニ才  
ニノ大災難起シリ洪水全地ニ汎濫シ毒液四方  
ニ流シ人畜為ニ斃ル者夥シ

四

イロゾーキ東印土商會ノ奴輩ニ令シテ尋常朝  
夕ノ祈念ノミナラス說法ヲ聞キ神歌ヲ唱ヒ祭  
日寺ニ詣スルヲモ禁止セリ長寄妻木彦右衛門  
ハ死去セル甲斐之巫ニ代テ所奉行トナレリイ  
ンゾーキ則チ詔官及ヒ乙名ヲ伴テ彦右衛門ノ  
新任ヲ賀シ併テ長ク其職ニ在ラレトテ請ヒ適

長寄口インテ  
テ訪フ

宜ノ進物ヲ捧ケリ而メ爾後恩惠ヲ受ケレトテ  
請テ尊敬ス則チ親切ノ答語アリテ阿蘭商業ノ  
ノ為ニ注意スヘシト云リ後彦右衛門多勢ヲ伴  
テ出島ニ来リインゾーキヲ訪ノ商館ノ園藝阿  
蘭式ニテ栽培スルヲ見テ大ニ歎ヒ又日本將軍  
ヘ献上スヘキ諸品ノ珍奇ナルヲ見テ驚讚セリ  
イロゾーキ更ニ波斯製ノ笛ヲ吹キ火酒及ヒチ  
ント酒ヲ以テ饗應ニタレハ大ニ満悦シテ歸シ

其後彦右衛門話ス長寄一賤人ノ女夜中自縊シ



ニタルアリ。詳カニ探索シテ隠事露見セリ。其原  
因左ノ如ク。一ノ支那舟士アリ。偶其女ニ懸相ス。  
一日本人ノ媒介ニ依リ。大ナル約束ニテ情ヲ達  
スル。一ヲ得タリ。後ニ及テ其女熟考スルニ。孕メ  
ル。一ヲ悟ル。是ニ於テ他人ノ悟ラセ。一ヲ畏シ。自  
ラ此其不幸ヲ招キタルナリ。依テ其媒介人ト支  
那人トヲ入牢セシメ。後久クシテ此兩人共ニ寛  
典ニ處セシレ。支那人ハ本國ニ追放シテ終生日  
本ニ至ル。一勿ラシメ。日本人ハ五島ニ放逐シ。兩  
人ノ所有スル貨財ハ没収シ。其一介ヲ死シタル

女ノ両親ノ扶助金ニ賜ヘリト。  
後女時ニメ興兵衛様残酷ニ二人ヲ殺害セリ。蓋  
シ輕卒ニ因ルノ失錯ヲ罰スルナリ。一ハ十三  
歳一ハ十五歳ナリ。一。一夜長崎市中火ヲ失レ。焰  
勢頗ル猛ニメ。大街四所ヲ焼ク。大畧百家ヲ失ス。  
為ニ巨商産ヲ失スルアリ。蓋シ避災庫ヲモ焼ク  
レハナリ。

十二月二十九日長崎地震ス時々休止スルカ如  
キモ。復タ震搖ス。就中翌年一月三日ノ夜ヲ尤モ  
劇烈ナリトス。其始メ家屋棟梁先ッ弛解シ。柱倒



壁崩ル一般ノ騒動漸ク甚シク天明ニ及テ僅カニ  
騒動地震共ニ鎮静シ市上始テ歩行スルヲ得  
ルニ至シリ

ロームニ徒二十五人恐ルヘキ苛責ヲ恐クノ後  
長寄市外ニ誘導セリ身ヲ倒シ高ク足ヲ掛  
ケ頭ヲ依テ徐々ニ死ニ就クニト晝夜此ノ如ク  
苛責ニタルニ内二人アリ所奉行ニ謁セリ  
請フ則チ苦責ニ耐カルヲ以テ日本教愛宗ニ口  
ノムセ教ヲ棄ンテヲボム依テ束縛ヲ脱シ十字  
ヲ嘲リ且ツ摩理及ニ基督ノ像ヲ踏ム而テ他人

ニ説テ曰ク難澁ナル兄弟今此苛責ニ遇テモ汝  
輩若シ心ヲ轉セハ亦寛解ヲ得ヘシト然ルニ他  
人曰ク悲哀啼哭唯此ノ暴戾ナル世界ヲ離脱シ  
昇天セシトヲ冀メノニ既ニ是ニ至シハ日本残  
酷人ノ力達スル所ニアラス無限ノ歡樂ヲ得ヘ  
シト

此輩到懸セラル七日間ナリ更ニキリスト徒  
幾覺スル者七十四人アリ皆斬首セラル倒懸者  
尚頑信ニテ志ヲ轉セス曰ク我輩早ク天ニ昇テ  
相逢フヘシト七十四人中婦人ノミナラス小見



及に乳見ナリ。皆斬首セラル。之ヲ見首ニ遺體ハ  
 穴ニ埋ムイレゾキ親シク之ヲ見テ此殘刑ニ  
 處セラレタル日本人敢テキリスト教旨ヲ深知  
 スルニアテカレニ。尚頑然固執スル所アリハ大  
 ニ驚ク所ナリ。和蘭訃官彼輩ニ告テ曰ク何故ニ  
 頑迷悟ラスキリスト教ヲ固信ニ妻子ヲ奪テ苦  
 死スルヲ願ミカレヤ。  
 二月四日五日及ニ六日水上ニ凍死スル者三人  
 アリ。此月十四日及ニ翌日京都大火アリ。壺ニ  
 大街六十町ヲ炭トナスノミナラス。餘焰延テ内

三月二日インデトキ陸路小倉ニ赴ク。大  
 村候舟ヲ賜リ時津ヨリ彼村ニ送シリ。此兩地清  
 浄セリ。又紳士隨行シテ大ニ蘭使ヲ饗應セリ。彼  
 村ノ側ニ府内城アリ。入口ハ大ニ廣キ階級アリ。  
 西側大岩石ニ成ル。門前十六級アリ。兩道アリ。門  
 後ニテ再ニ相合ス。門ハ四角ナル地上ニ建ツ。多  
 石ヲ以テ支柱ス。前ニ柵アリ。十字ニテ固定ス。此  
 四角地上ニ二重ノ手摺アリ。門ニハ弓伏ノ入口  
 アリ。中間ハ二重ノ柱ニテ分界ス。宮殿ニ行クノ



天井下ニハ前庭及ヒ立派ナル正廳アリ。屋根全  
躰アルヲ以テ現着ナリ。大ニ壁ヲ過キテ提出ス。  
上ニハ二個ノ鍍金セル球アリ。此前門ノ穴ヲ通  
シテ内門ヲ見ルヘシ。其屋根亦全ヲ列ス。淵キ  
大級ヲ經テ是ニ至ルヘシ。此門廣キ入口三アリ。  
其屋根ノ四隅尖ニ金龍アリ。此内門ハ長キ廊下  
ノ中門ニアリ。八個ノ四角窓アリテ外ニ向リ内  
部亦然リ。提出シタル屋根ノ下縁ニ鍍金セル圓  
形ノ水溜アリ。廊下ノ左右西側ニ二個ノ立派ナ  
ル橋アリ。三層ナリ。其層次第ニ小ニメ。五ニ排列

高野堂

ス。此内ニ府内候ノ財寶ヲ貯藏ス。其側ニ進メハ  
壯麗華美ナル宮殿アリ。樹木繁茂ス。寶庫ノ後ニ  
他ノ二庫アリ。構造相同ニ。是候妃及ヒ侍妾ノ住  
スル所ナリ。其一隅ニ有名ナル高野堂アリ。弘法  
大師ヲ奉ス。豊後候ノ菩提所トス。國候若シ他國  
ニ於テ葬ムルナラバモ其齒骨ハ必テス。此堂内  
ニ納ムト云フ。

水陸堂

インゲーキ小倉ヨリ小舟ニテ下ノ関ニ至リ夕  
ルニ本船ハ荷物及ヒ献上品ヲ載テ既ニ先ツ停  
泊シ我ヲ侍ナタリ。三月七日下ノ関海口ニ出テ



七日内、大阪に着セリ。和蘭旅舎主人海老屋四郎右衛門、詔官ト共ニイレデシキ到着ヲ二所奉行ニ教知ス。翌日謁見。進物ヲ呈ス。兩家共ニ丁寧ニ應接セリ。イレデシキノ為ニ旅行券ヲ與ヘ。牧方迄及ヒ伏見ニ至ル。先奉行上月三良右衛門ヨリノ書ヲ所司代牧野佐渡様ニ寄ス。即日謁見ヲ賜フ。進物ヲ厚謝シ。イレデシキノ新ニ旅行券ヲ與フ。依テ直午ニ出途。草津ニ宿シ。次テ阪ニ宿シ。桑名ヨリ舟ニテ涉リ。夜宮ニ達シ一宿ス。進テ岡寄ニ宿セ。レトシタルニ舊旅舎ハ閉テセ

リ。是近隣人トノ間ニ起リタル紛紜ノ一ヨリ。生命ニ関スヘキ事件ニ及ヒタルトノ事ナリ。故ニ赤阪ニ宿セリ。是ヨリ荒井灣ヲ涉リ。舞阪ニ至タルニ大雨ノ為ニ濱松ニ宿セリ。翌日金谷ニ達セ。レト欲スルニ兵卒看護シ。夜ニ及テ強雨ナルヲ以テ出立ヲ許カス。尚急流ヲ冒シテ大井川ヲ涉リ。島田ニ宿ス。鞠子ニテイレデシキ又舊旅舎ニ入ルヲ得ス。是其家主駿河ニ拘留セラレタリト云リ。蓋シ其子一土人ト負債ノ為ニ入牢ニタリ。故ハレカ為テリトイレデシキ島田ヲ出立



スル後江尻三島小田原及こ戸塚ニ宿シ千六百  
十一年三月二十八日江戸ニ着セリ都下尚夥シ  
ク空地アルヲ見ル職ニ勉力建築ニ從事スルモ  
未タ遑アリ及ハカルナリ橋梁尚半燼ナルアリ  
故ニイシゾリキ旅舎ニ至ルニ遙カニ迂路ヲ取  
ラザレバ得ナリシ

既ニノ辛ノメ到着ニ則チ詠官ハ左衛門及ヒ旅  
舎主人源右衛門ヲシテ長寄奉行兵衛様及ヒ  
筑後殿ノ跡役和蘭事務總轄北條安房守様ニ到  
着ヲ教知セシハ八左衛門及ヒ源右衛門歸リ報

ス。両家ニテ和蘭人ノ無滞且ツ無恙到着シタル  
ヲ祝セリト又曰ク明日執政ニ報スヘシト且ツ  
命ス將軍ニ呈スル前ニ於テ献上品ハ早ク送り  
来ルヘシト

筑後殿ノ秘書記二人インゾリキ江戸着ノ二日  
前ニ旅舎ニ来リ曰ク前年囑スル所ノ器械ヲ速  
カニ達センコトヲ望ムト八左衛門再ヒ兵衛様  
ニ赴キイニデノキノ名代ニテ對話セシコトヲ請  
フ許可ヲ得タリ話次兵衛様曰ク近頃一日將  
軍親シク執政ニ問フ和蘭人年々一回来ルヘキ



○何故本年ハ遅々スルヤト執政答ヲ彼近日未  
ルヘシト思フニ此ノ如ク將軍ノ意之ニ及フハ  
非常ノ崇奉ト云フヘシト然ルニイレデイヤノ  
願ニテ將軍及ヒ貴權諸家ノ献上品目錄ヲ呈シ  
取捨増減ノ一ヲ商議スルニ方テ各品ニ附貼ス  
ルノ價額ヲ逐一熟覽スルノ後忽テ勵聲憤然ト  
メ曰ク和蘭人逐年献上品ヲ減省ス是終ニ無  
至ラシムルノ意ナルヘシ豈ニ羅紋ニ乏シカラ  
レヤ

ハ左衛門歸來此事ヲ告クイレデイヤキ若シ詔官

ノ言ヲ信ナリトセハ大ニ訝ル所アリ此人因ヨ  
リ造語瞞着家ナルハ他ノ知ル所ナリ凡ソ事ア  
ルヲ好テ之ヲ擔當スル所以ヲ考一ス抑モ唯貴  
價ノ異物ヲ献スルノ外尊敬ヲ表スルノ策ナシ  
トスルヤ逐年ニ献品ノ額ヲ増多スルヲ要スヤ  
但シ終ニカレモイレ紅羅紋三卷ヲ添加スルニ  
決セリ是ニ於テ典兵衛様満足ニテイレデイヤ  
ニ接話ヲ許ス則チ之ヲ訪フニ典兵衛様ノ子外  
記殿ニ逢フ立派ナル室ニテ親切ニ交シリ家族  
皆出テ接ス而シテ最後ニ典兵衛様自ラ来リ大ニ

御三卿御書



イニゾーキヲ饗應ス隔意ナシ曰ク直クニ登城  
 ニ將軍謁見ヲ促カナラレテ請ハレトテ云テ  
 去レリ上和書記ニ右衛門ニ命ニ蘭使及ヒ從者  
 ヲ饗應セシムニ右衛門酒器ヲ携ヘ来リ先ツ能  
 ク食ニ能ク飲ム與兵衛様ノ細君モ手製ノ苺梅  
 及ヒ他ノ美味果實製ノ酒ヲ供ス殊ニイニゾー  
 キノ子ヲ賞愛シ一二ノ贈物アリ更ニ彼此ノ品  
 ヲ其姉妹ニ寄贈セシム且ツ曰ク日々来リ到ラ  
 レテ望ムト日本貴家ノ女ノ粧飾ハ非常ニ花  
 麗ナリ與兵衛様ノ細君ノ如キハ尤モ秀タル者

ナリ但シ此ノ如キ職位アル人ノ婦人モ察スル  
 ニ皆此ノ如クナルヘシ尤モ驚クヘキハ日本ノ  
 農婦ハ就中頭濶大ナリ日々鉄水ニテ毛髪ヲ洗  
 フヲ以テ光澤アル下漆ノ如シ處女ト既婚女ト  
 ノ別ハ前頭毛ニテ知ルヘシ既婚女ニハ前ニハ  
 開キタル巾ヲ着ケ後ニ鬘アリ凡テ風雨及ヒ裂  
 日ニモ裸露ス然シモ大家ノ婦女ハ時々緊窄ニ  
 タル帽ヲ冠ル其端稅尖ナリ髪毛ハ耳ヲ過キテ  
 肩ニ依ル絹製ノ剪絲花枝ヲ背ニ浴ヲ挿上衣ハ  
 胸前ニテ斜ニ交叉ニ總テ貴價ナル精絹ナリ



ル十シ就中濶上衣ニハ尤モ縫箔敢乱セリ上衣  
 非常ニ濶ノ上身及ヒ兩臂ヲ被テ腹ハ濶帯ヲ纏  
 下ニ是殊ニ巨額ヲ費ヤス所ナリ然レ此上衣ノ  
 下ニハ更ニ他衣アリテ或ハ十層二十層或ハ更  
 ニ多数ヲ重疊スルナリ各般ノ深色ナリ外出  
 スルニハ後ノ鼻緒ヲ大趾ト第二趾トノ間ニ挿  
 ヲ又白足袋ヲ着ク日本人之ヲタビト糸貴人ハ多クハ紅色或  
 ハ黑色足袋ヲ用テ凡リ貴家妻妾及ヒ女女ハ從  
 者ヲ伴ハカレハ外出スルナリ各從者各自ノ  
 職掌アリテ主婦ニ侍從ス既婚ノ貴女ハ決シテ

白晝ニ他行スルナリ門外ニ出ルニハ心ヲス  
 輪ニ乗ル又水遊スルニハ幕ヲ張ルノ舟ニ乗ル  
 夜ハ或ハ逍遙散步スルナリ共心ヲス其丈ニ  
 伴ハサレナリ  
 イニゾーキ兵衛様ノ家ニテ饗應セラル多  
 時喜ヲ述ヘ別テ告ク兵衛様ノ上留守居島兵  
 衛殿新ニ第三長寄奉行ニ任シタルニイニゾー  
 キ街ニテ逢テ同行ヲ要請ス是第二長寄奉行ノ  
 家ニテ饗應セシカ為ナリイニゾーキ他事ニ托  
 シテ日本人ノ好意ヲ無ニスルヲ歎セス則誘ハ



レ三郎内ニ入タルニ日本常例ノ如ク丁寧ニ饗  
應セテレタリ坐テ命ニ為テ勸メ一脚テ漆塗  
臺ニテ茶及ヒ酒ヲ供セリ敢テ失費ヲ論セス美  
味盛膳ヲ供ヒリ此ノ如ク饗應ノ後歌曲管絃ノ  
歡ヲ助クルアリイロデキ夜ニ入りテヨリ旅舎  
ニ歸レリ往者皆多飲沉醉セリ凡ソ日本人ハ割  
烹店ニ行クヲ為サス旅客ニハ到ル所ニ好旅舎  
アルヲ見ル然レ互ニ自家ニ會合ニ飲酒ス  
ルモ同業相争テコトナク多ク醉ハカレ人他ヲ  
饗應シテ歡樂ヲ執リシム

江三失火

翌日イロデキニ詠官ヲ兵衛様ニ送り饗應  
ヲ海謝セシメ且ツ殿中ノ景况ヲ知ラシメテ求  
メシム兵衛様詠官ニハ詳事ヲ告ケス別ニ一  
吏ヲイロデキニ送り告テ曰ク明後日<sub>二月</sub>將軍  
謁見ヲ賜フ一ニト是ニ於テイロデキ諸貨物  
ノ包捆キ各々ヲ順次ニ整理セリ衆之ニ任事シ  
テ夜ニ入りタルニ市中偶火ヲ失スルアリ我旅  
舎ヲ距ル一放砲程ニ過キス火光鮮明ナリ家  
主大ニ憤リテ曰ク我屋四十年間災ニ罹ルテ三回  
悉ク貨財ヲ失ストイロデキ散乱セシ進上品



ヲ避災庫内ニ納ノ寓ヲ泥塗ス各人驅セ来リ  
貨物ヲ保護セシトス幸ニノ類焼テ四家ニテ鎮  
大セリ蓋ニ非常ニ徳天ヲシハナリ

將軍ニ謁見セシトスルノ日イロゾリキ先ツ献

上品ヲ殿中ニ送り奉行ノ案内ニテ登城ス將軍

宮殿ノ門ニ接近シテ番所ニ入ル茲ニテ兵衛

様及ヒ他ノ官吏ヲ見ル待ツル凡ソ一時兵衛

様内ニ入り復タ出テ来リイロゾリキヲ導テ殿

中ニ入ル廊下ヲ過キ番所ニ誘ハル北條安房殿

ニ謁ス此人イロゾリキニ親切ニ應接セリ將軍

ハ謁スルノ式ハ八五衛門ノ教諭ニ依ル此演習

スルニ方テ命アリ曰ク使節来シリト安房殿及ヒ

兵衛様及ヒ未タ知テハ諸官吏前行スイロ

ゾリキヲ献上物ノ傍ニ居テ將軍ニ正對セシム

イニゾリキ著坐スニ從者後ニアリ此時松平備

前様執政伊豆殿ノ弟ナリ喚テ曰ク阿蘭陀加比

丹ト是全言条此語ニ應ニテイニゾリキハ頭ヲ倭

テ席ニ接ス既ニノ稍高ク頭ヲ拳テ將軍ノ褥上

ニ坐スルヲ見ル伊豆殿手ニテ背ヲ壓ニ顔ヲ地

ヨリ拳クレヲ許サケルシ徴トス



ハシキキノ子  
殿云

既ニメケロゾリキ命セウニ番所ニ退去ス。諸官  
更来リ將軍ニ謁見ニ昇リタルヲ慶賀ス而メ皆  
容易ニ去ラス。一官吏トシテゾリキノ子及ヒ詎官  
ハ左衛門前ニ下商官ニコウリスラ口エラ伴  
去テ將軍ノイニゾリキニ謁見モタル席ヲ見セ  
シム。執政尚其所ニ集坐セリ。見ノ年數産地及ヒ  
名稱ヲ問フ則チ書シテ曰ク六歳半暹羅ニ生ル  
ゲリルドト稱ス。此見將軍ノ美禱ヲ見テ詎官ニ  
問フ將軍時々之ニ生スルヤ。執政問ノ言フ所何  
タルヤ。ハ左衛門曰ク禱ノ美ナルヲ驚讚シタル

諸家同勤

ナリ。ゲリルド更ニ大ニ鍍金スル屋及ヒ立派ナ  
ル將軍坐所上ノ天井ヲ注視セリ。甲乙ノ人幼童  
ノ手ヲ引テ各種ノ宮殿ヲ示シ終ニ又ノ許ニ至  
依テ退去テ許セリ。  
イニゾリキニ二日間諸家ヲ尋訪ニ進物ヲ分配ニ  
回執政及ヒ他貴官殿家ニ至ル。又他家ヨリノ来  
訪ヲ請ク尊敬ノ意ヲ表スルニシテ酒及ヒ火  
酒ヲ呈シ全日ヲ消セリ。来客中彦右衛門ノ子ヲ  
リニ百人番中ノ一人ヲ伴ヒ来ル。其膝上ニ阿蘭  
外科醫ハ大硬膏ヲ貼シ彦右衛門ノ子ニ左耳ニ



少許ノ油ヲ注ケリ。是疼痛ヲ鎮止スル為ナリ。既  
後殿ノ細書記来テ亡君求ムル所ナル天球地球  
而儀ヲ返度セリ。

四月十日イコデーキ再ニ登城ス。蓋ニ告別拜謁  
ノ為ナリ。番所ニ在テ待リ。一時安房殿典兵衛  
様使節ヲ導テ非常ニ結構ナル室ニ入シ。四執  
政列坐シ一人ハ別坐シ。鍍金セル摺戸ニ對坐ス。  
上席ハ酒井雅樂頭様吹テ伊豆様豊後様及ニ美  
濃様ナリ。最上執政告テ曰ク阿蘭使節ト葡人ノ  
我國ニ向テ逆意ヲルルヲ報知セシテ日本將軍

ノ大ニ満足スル所ナルハ。汝ノ知ル所ナルヘシ。  
又將軍ハ支那船ノ日本ニ航スル者蘭船ノ為ニ  
妨ケラレト勿ラコトヲ望ム。イコデーキ答テ曰  
ク日本執政ハ蘭人ヲ信シテ疑ハス。蘭人亦拳テ  
日本ノ厚意ヲ保持セシテ望マケルナキナリ。  
故ニ常ニ海上ニ注目シ。若シ葡人ノ日本ニ攻撃  
セシトスルヲ知ルナラバ直ニ之ヲ長崎奉  
行ニ通知スヘシ。又東印土商會ノ和蘭領事ハ若  
シ海上支那船ノ航路ヲ遮リ大害ヲモ加フル者  
ナラハ心ヲス重罪ニ處スヘシ。雅樂殿更ニ約ス



若し伯帯比亜臺灣及び日本ノ間ニ於テ海上ニ  
 ラモ一ニノ國土或ハ陸地ニ於テモ葡人ヲ獲覺  
 スルヲテハ又葡人ニ之ヲ知ラシムル前ニ於  
 テ早ク長寄奉行ニ報知スルヲ急ルテ勿レト  
 イレテキ味ニテ此細ニ背クヲキテ保証ス  
 使節退去セシトナリテ呼出マシ時服三十ヲ臺  
 上ニ置キ賜フ此時典兵衛様曰ク蘭使ノ尊敬ニ  
 テ献上物ヲ捧ケタルハ將軍ノ満足スル所ナリ  
 故ニ此返礼ヲ賜リ且ツ長寄ニ向テ旅行スルノ  
 暇ヲ賜フト

イレテキ安房殿ノ報ノ如ク時服ヲ頭上ニ戴  
 キ恩賜ヲ謝シ退出ス時服ハ三櫃ニ納テ蘭人ノ  
 旅舎ニ送テル又イレテキ各改官ノ邸ニ就テ  
 謝辞ヲ述テ安房殿ハ遣ハカレ書記應接ス  
 イレテキ諸事進接ノ速カナルヲ深ク感謝ス  
 則チ時服ニテ賜ヘ更ニ親切ノ語アリ  
 自後各貴官ヨリ使ヲ蘭舎ニ送り時服ヲ賜テ使  
 節イレテキハ諸家廻勤中ナルヲ以テ下商官  
 ニコトリスデロイニ一々丁寧ニ之ニ應接セリ  
 ゲラルト雅樂殿ニ招カルト二回貴客ノ膝前ニ



予此女年ヲ弄ヒ大ニ慰ヒトセリトイヒテデトキ出  
途近々ニアリ諸事整理ニタシヒ尚一車ノ遺ル  
アリ淡草寺ノ主僧ヲ往訪リヘキナリ是執政太  
田備中守様ノ弟ナルヲ以テ招カレタリイヒテ  
イキ歐羅巴製諸玩物ノ外精巧ナル亦造小舟ヲ  
呈ニタシハ主僧大ニ之ヲ驚讚悦喜ニ曰ク之ヲ  
寺堂ノ柱ニ掛ケ長ク蘭人ノ記念ト為レト歎ス  
ト且ツ大ニ使節ヲ饗應シ寺内諸所ヲ案内セリ  
是ニ於テ日本信心ノ秘奥ヲ聞クヲ得タリ更ニ  
答礼ナリトシテ少許ノ海藻ト銀四枚ヲ寄セリ

イヒテイキ和蘭事務總轄安房殿ニ各種ノ精巧  
硝子ヲ呈シ割ヲ請リ安房殿大ニ硝子ヲ珍重ス  
然レ氏告別ノ事今機曾ヲ得ス後日ヲ待蘭使ヲ  
饗應シ旅中安全ヲ祈ルノ一語ヲ述レト歎スト  
之ト為ニ数日ヲ消セリイヒテイキ旅舎主人ニ  
食料家料倉料ヲ償辨ス主人請テ曰ク願クハ千  
タールヲ借用ト此依頼ヲ拒絶ニテ曰ク今回ノ  
旅行物價飛騰ニ際シ雜費ノ多額意算ノ外ニ出  
テ今ヤ餘財ニ乏シ然レ氏此人ヲシテ無異ナ  
リトモレカ為ニペルペリユアノ三片ヲ與



7是並ニ彼ノ意ヲ滿タシムルニ足ラサレナリ  
 イレゾーキ大饗應ヲ受ケルノ後四月十五日江  
 戸ヲ出立セリ旅舎主人送テ川寄ニ至ル其後戸  
 塚小田原ニ島金谷濱松是ヨリ舟ニテ荒井灣ヲ  
 渡リ高坂及ヒ宮ニ泊ニタリ蘭使此地ニテ非常  
 ノ厚遇ヲ請タリ德水ナルヲ以テ舟ヲ待テ夜半  
 ニ至ル荷物及ヒ馬ハ既ニ舟中ニ積ミ入レタシ  
 氏航ス可ラサレヲ奈何トモスルナリ日出前  
 ニ時インゾーキ京名ニ着ニ四月二十五日ニ京  
 都ニ入レリ

此地ヲ距ルテ八里大湖ニ沿テ有名ナル硫黄山  
 ニユルビエラニアリ嘗テ蘭使セルデレ式ニテ  
 詳記セリ日々此山ハ高サ測ル可ラス其頂上ニ  
 リ常ニ濃煙ヲ發シ且ツ火ヲ噴キ焰光天ヲ衝ク  
 煙ハ風向ニ從テ方位ヲ轉ス故ニ或ハ下吹スル  
 ナリ此時晝ニ白晝ヲ暗夜ト為スノミナラス  
 人畜ヲ窒息セシム此山ノ側ニ茅二山アリ其頂  
 稍低ニ兩山共ニ頂上粗ニメ角アリ聳起ス三個  
 ノ硫黄地アリテ岩石繞禰間ヲ纏テ下ニ急流注  
 落ス或ハ硫黄流澤スルナリ然レニ濃煙膏結



硫黃記事  
金銀及他之生處  
ヲ述ス

大響ヲ震シテ。谷口充滿ト。或ハ他道ヲ求メテ  
注瀉ス。或ハ深溝ヲ通過スルヲアリ。或ハ大岩石  
ヲ轉墮スルヲアリ。此ニ流注下スルヲ半時ノ後  
散蔓シテ諸地ニ擴張ス。此山ノ周圍ノ原野炎熱  
ナルヲ以テ行人長ク立ツヲ得ス。忽チ雷ヲ損  
毀ス。

硫黃ハ脂質ニシテ且ツ精細ナリ。此下ニ生シ水銀  
ト混シ。銅銀金及ヒ他ノ鑛物ヲ産出ス。凡ソ世上  
ノ万物保持スル所以ハ地下ニ二種ノ蒸氣アル  
ニ由ル。一ハ乾燥シテ水分ヨリハ土質多シ。一ハ  
温濡ニシテ土質ヨリハ水分多シ。而シテ土質性蒸氣  
ハ石ニ成育ノ質ヲ供シ。水分性蒸氣ハ硫黃及ヒ  
水銀ヲ生ス。此ニ物混合スルヲリ。金銀及ヒ諸般  
ノ鑛屬ヲ生シ。此蒸氣ハ金石ノ如キ硬物ヲ生産ス  
ルヲ疑フ者勿ルヘシ。何トナレハ此ノ如キ蒸氣  
ハ極テ濃厚ニシテ朦朧タレハナリ。故ニ坑支屢坑  
中ニテ窒息スルヲアリ。或ハ坑中ニ死セザルモ  
危險ナル感冒ニ罹ルヲアリ。此耐一カヲナレハ蒸  
氣ハ水分ト土質ト相混スルヲリ。何トナレハ水  
様ナルハ溶解シ。土質ナルハ固結スルヲリ。此硫



黄ハ火ノ食物ナリニエルビエラニノ頂ハ之カ  
為ニ燒ク所ナリ則チ地下ノ火ノ確証現然ナリ  
土頂ノ地下ニテ温暖トナルハ地上ニテハ日光  
ニ映スルカ如シ

然レ氏ニエルビエラト共ニ他ノ火山ノ有る  
ナル者ハエスステラドノヘクナリビトマル  
ブレステン確証ヲ示レテ一ルナラ記スルナ  
リ如シ

エイスラドノ北方海邊ニヘクナリ時ニ或ハ  
怒ルヘキ火焰ノ外黒色水及ヒ大ナク石ヲ投出

ス千五百六十八年十二月二十九日ヘクナリ破裂  
ニ其響エイスラド全地ニ震動セリ各人非常  
ニ驚駭ス其響天ニ應ニ数千ノ大砲ヲ一時ニ轟  
雷スルカ如シ火焰天ヲ衝キ土地地震揺ニ濃煙全  
島ヲ蓋ヒ或ハ時昏里トナリ咫尺ヲ辨セス或ハ  
時ニ火光燦爛ニテ夜中忽チ白晝ニ異ナラス硫  
黄水陸地ニ注流スルナ六里外ニ達セリ

又ナルナリトシノ一山破裂ノ如キ亦之ニテ  
ス曾ラパナリユスワハレカナルデレニ属スル  
一船此地ニ停泊シタル日偶雲上ニ火光ヲ見ル



吹テ里煙湧起シ。次第ニ空中ニ散乱ス。阿蘭ヨリ  
東印土ニ航スル第一船ヤレヤロスグリーンモシ  
「ナール」及「コルネリス」オウトマレ」ノ指揮ニテ  
進行スル所バナリエカレ街破裂セタルニ大ニ  
驚キタリ。此時其地諸山恐ルヘキ煽ヲ發シ。雷鳴  
セリヨセブデアコス迄ノ説ニ據シハ。亜墨利加  
ニハ各種ノ火山アリ。就中アルレキエイパハ全  
ク砂山ニテ高カニ日行程ナリ。墨是哥ニハハデ  
ロスアングロス村ニ沿テ一山アリ其脚三十里  
占ム不可測ノ高頂ヨリ日出日没ニ影ニノ灰及

ニ煙ヲ噴キ。天ヲ衝ク。其煙直上ス。然レ天際ニ  
至シハ散乱セテ羽毛ノ如ク。終消滅ス。後濃里雲  
トナル。此山ヲ距ルル数里ニ第二山アリトナキ  
カカトト糸ス。此地日々大雷鳴ヲ聞ク。返光放射  
スルヲ見ル。然レ就中ギエアチマナ山尤モ高  
シ。其頂ハ雲表ニ出ツ。南海遥所ヨリ見ルヘシ。千  
五百八十六年十二月二十三日大ニ火ヲ發シ。燃  
物ヲ高ク噴出セリ。其紛乱飛散スル者下降スレ  
ハ灰及ニ焼石ナリ。此ノ如キ一六ヶ月其間地震  
連搖ニギエアチマナ街上下顛覆シ。土堆中ニ数



千人埋まり没す。此時ニ方テゴラスル。五ノ山ヨリ夥ニ夕灰ヲ飛ハシ散乱ニ晝間昏冥トナル。数里ノ間一人モ散ラ戸外ニ出ル者ナシ。アエスノ曰ク西班牙僧亞墨利加火山ヨリ多量ノ金ヲ得タリト依テ鉄鑪及ヒ鉄鑪ヲ穴ニ入レ試ニタルニ此諸器僅カニ火焰ニ接スレハ則チ熔解ス。

五ノ山ニ有名ナルエトナ山アリ。方今ハモシギベリロト稱ス。地中海ニ沿テ圆形ニ鉄ヶ夕ル角ニアリトマスハセルリユス之ヲ証言スル

ト左ノ如シ。ゴエトナハ南及ヒ西ニ盛留ナル村アリ。此地非常ニ美味アル葡萄ヲ培養ス更ニ美果及ヒ既菜ヲ産ス。此頂ハおイシ石ニ成。此石ハエトナニ夕産スル所ナリ。各所ニ噴泉アリ或ハ愉快ナル小川アリ。其中焰ヲ吸収スルアリ或ハ燒ケタルおイシ石ヲ含蓄スルアリ。又山ノ頂側ニ非常ニ重大ナル石塊アリ。是年五百三十七年卒然噴出シタルナリ。此山常ニ煙ヲ噴ク。又煙ト焰トノ大ニ高昇スル所ハ其周圍一里ニ過ク。内部ハ火ノ為ニ見ル可ラス。頂上ヨリ稍下ニハ不



溶ノ雪アリ。夏日モ全融スルナシ。煙燄通過ス  
ルノ當道ノミ。僅カニ溶解ス。火燄奔流ノ如キ勢  
ヲ為シテ谷ニ赴クナリ。則チ上ニ記スルノ年  
ニ於テ。エハナ山上ニ穴ヲ穿テリ。其穴極テ廣シ  
然レモ高カラズ。其穴ニ接近スレハ洞内雷鳴ヲ  
聞ク。而シテ噴煙ノ穴ハ恐ルヘク潰崩ス。ヒリッビ  
ス。スリリエヘリク。ス証言ス。ユトヨリ一万六  
千歩ヲニ投出シタル石ヲ見タリト。又焼ケタル  
硫黄夥シク堆積シテ一道ヲ為ス。ナリ。長サ四里  
百物悉ク焼失シテ痕ナシ。

又以太里ニ硫黄山アリ。ヘシヒク。ト稱ス。時々  
溢出スルナリ。孰中尤モ盛ナルハ四百七十ニ  
年十一月ノ焼出ナリ。飛灰公担丁ニ達セリト云  
ノ。羅馬領ニ數百年來ノ習慣トナリタル年々ノ  
新食日アリ。ロセパスカリゲルノ説ニナリ。ハ是此  
ノ火災ノ記念ナリト。

更ニ綿密ニ探索ヲ要スルナリ。何故ニ火山ア  
ルノ地ハ極テ富饒ナルヤ。抑モニトナリ。トノ。豎昌  
スル所以ハ。エトナ山アルニ由ルニエル。ピエナ  
マ。ハ日本王國尾張ニアリ。蓋シ地下ノ火ノ強カ



アルニ由ル。地下ノ通路ニヨリ温ヲ四方ニ分配  
 スル。猶自然ノ温暖ヲ心ヨリ全身ニ遍布スル  
 カ如シ。此地下火ノ眞實ナルハ。後件ニ依テ領  
 知スヘシ。其地冬時之ヲ垢レハ。煙ヲ吹ク。又霜雪  
 田畝ニ下ル。アールモ。忽チ融解ス。日光照射スル  
 ニ由テ水及ヒ地ヨリ蒸氣ヲ獲モ。氣中ニ入り清  
 淨トナリ。霰雪霜露或ハ雨トナリ。下墜ス。然レ  
 此地中ニ入ル。一十尺ニ過キス。天温ハ湿濡セリ。  
 地ヲ暖メ。地味ヲ富饒ナラシム。但シ此富饒ヲ為  
 スニハ。地下ノ火力大ニ興テ効ナリ。則チ種子及  
 ヒ植物ヲ蒸スカ如シ。

又山頂ヨリ温泉ヲ噴ク。アリ。是地下ノ火力ニ  
 由テ温ノ為ニ水騰昇シ。穴ヨリ噴出スルナリ。猶  
 葡萄酒ノ液ハ蒸昇シ。温ヲ失ヒテ凝集シ。再ヒ液  
 トナリ。銅蛇管ヲ経テ滴出スルカ如ク。又胃中ノ  
 蒸氣上騰シテ。腦ニ至リテ濃厚トナリ。鼻口ヨリ  
 流失スルカ如シ。  
 又温湖温泉共ニ類例ト為スヘシ。是地下ノ火力  
 ニ由テ蒸カレル者ナリ。然ラサレハ日本ノ地獄ノ  
 如キ。幾ソ能ク此ノ如ク有カテラシヤ。之ヲ體上



ニ注ケハ肉爛レテ骨ニ及ヲチリ。又以太里ノバ  
ルマニ在ル凹ハハル口ニウズノ説ノ如ク火燄  
ヲ引キ入レ水ヲ燒テ蒸シシトヘシ。其燄ハ羅紗ニ  
テ被ケカ或ハ裂風ニテ強吹スルニアテテハ  
消滅スルニ能ハス

ニユルビエテハ數百年連テ火ヲ噴キ硫黄ヲ  
出シ隙隙ニ溢流ニ年月ヲ経ルニ隨テ土モ化シ  
テ硫黄トナリナリ以テ里ノモエテテ地方以テ  
之ヲ明証スヘシ其地穴ヲ穿テハ則チ硫黄ヲ得  
ヘシ之ヲ土ト共ニ放置スルニ四年間ニ於テ其  
土全ク硫黄ニ變スルナリ

又地下火ハ山物ヲ産スルノ要件ナリ。各自ノ熱  
度ニテ煮キ溶カサレ清浄トナリタル者放冷ス  
ルハ凝結シテ體ヲ成スナリ。又此火力地震ノ源  
トナル。故ニ時々地ノ陷没スルナリ之ニ依テ  
食物ヲ得シハ恐ルヘキ盛燄ヲ獲スルナリ。又  
日本ニハ方今夥シク坑中ヨリ金銀ヲ産シ又  
辱地震アリテ或ハ一山ヲ潰崩シ上下顛覆シ地  
底ヲ見金銀線ヲ現出スルナリ。地震頻回容易  
ニ地底ヲ見ルニ申テ則チ知ル地下深所ニ硫黄



夥ニク隱匿シテ地下火ヲ食リノ食物ト為ル

イニデーキニエルヒエテ己ラ側ニ見テ四月二

十五日京都ニ著シ直午ニ旅舎主人ヲ己テ所奉

行牧野佐渡様ニ到着ヲ報セシム則チ返礼ノ贈

物アリ且ソ出立ヲ許ス後旅舎主人ノ案内ニテ

劇場ニ赴ケリ日本人ハ此ノ如キ技藝ニ於テハ

頗ル巧ニエテ立派ナリ俳優ハ盛粧花奢ナリ驚

クヘキ容貌賞スヘキ行儀其高尚ナルヲ決エテ

歐洲古代又當時ノ演劇ニ讓ラズイレデーキ若

シ日本語ヲ解シ得ハ感賞スルヘ更ニ深カルヘ

キナリ後舎主ニ托エテ日本絹衣百枚ヲ購求ス

東向土商會ノ為ナリ又大佛及ヒ諸寺ヲ一見シ

京都ヲ出テ夜伏水ニ著シ之ヨリ舟ニテ大阪ニ

赴ケリ

此地ヨリ旅舎主人其朋友及ヒ奴僕相伴テ二遊

船ヲ泛テ大阪川口ニ出テ蘭人旅具ヲ置タル本

船ノ傍ニ投錨ス強西風ナリヲ以テ出帆スルヲ

得ス然ルニ小舟ヲ横ニシ本船ニ乗り入り日本

酒ニテ宴ヲ開ケ夕リ是舎主ヨリ寄贈スル所ナ



リ五月三日出帆十一日下ノ関ニ着ニ又小倉ニ  
至リ一宿ニ馬及ヒ運支ヲ雇リテ豊後ヲ經テ陸  
路長崎ニ向リナリ

小倉ヲ獲テ四日ニオリスマニ着セリイニ  
テ一キ一泊温泉ニ浴ニテ大ニ爽快ヲ得ナリ非  
常ノ美屋ナリ水ハ極ニテ導キ銅管ヲ附ス流川  
ヨリ浴室ニ注ク此川水一方ハ咽ヲ獲スル程熱  
ナリ人放テ指ヲ入ルニ能ハス忽チ皮肉潰爛ス  
又一方ハ寒冷ナリ則チ熱水ニ混入ス今浴ヲ製  
スルニハ先チ熱水ヲ引キ槽ニ貯リ浴者意ニ任

セニ冷水多寡ヲ和ニ適宜トスルナリ是自然ノ  
秘臭地下ノ火ニ源スルナリ水深所ニ在ル者地  
下ニ于熱スレハ噴井ヨリ溢出ス地下ノ流勢近  
路ヲ取ル者ハ火ニ温度ヲ失スルナリ或ハ火ニ  
近チ所ヲ直流ニテ噴出スルアリ又極ニ稀ナリ  
ト点ニ噴井相併ヒ一ハ温一ハ冷ナルアリ亦前  
記ノ理ニ由リ各急流ニテ其性ヲ保存スルナリ  
カリスモニ在ル川水ト同一理ナルニ  
日本人ハ此ノ如キ天資ノ水ヨリ各人ノ意ニ任  
セテ巧ニ使用ニ利ヲ得ルナリ抑モ浴ハ古来



ヨリ存スル所ナシ凡各地其法ヲ異ニス。舊ビス  
カエールスハ水ヲ用セス。尿ヲ用之ヲ遍身  
及ヒ艱肉ニ塗ルナリ。スセーシハ男子ノ體ニ  
水ヲ注キ磨石ニテ琢クヲ婦ノ職務トス。ダルダ  
ニールス及ヒイールスハ洗浴ヲ許ス。生  
涯僅カニ三回ノミ。則チ生日。瘡日。死日。是ナリ。舊  
猶逸人ハ河流ニ就テ日々游泳スルヲ数回ナリ。  
或ハ稀ニハ浴場ニ行ク。アールモ。多クハ食前ニ  
於テス。往時羅馬人ノ之ヲ固持スル。猶當時ノ  
土身古人ノ如シ。

何故ニオリスルノ浴ニ入ラントスルヤ。先  
之ヲ温ニシ。後ニ之ヲ冷ニスルヤ。蓋ニ浴セ  
トスル。其人冷ナリ。既ニ浴スレハ温トナル。但ニ尿  
ハ冷ナリ。又一異事ナリ。渴セキ者浴ニ入レハ  
渴ヲ獲ニ。又渴スル者浴ニ入レハ渴ヲ忘ル。是其  
理同一ナリ。抑モ渴ハ乾燥ヨリ来ル所ナリ。今渴  
スル者浴スレハ。全身汗孔ヨリ稀液ヲ体内ニ汲  
収スルヲ以テ。渴ヲ消ス。則チ乾燥スル者滋潤ヲ  
得レハナリ。然ルニ渴ナキ者浴ニ入レハ。汗孔開  
キ。汗及ヒ稀液ヲ蒸散スルカ故ニ。内身乾燥シ。



涓ヲ覺ユルナリ。

羅瑪人往古ハ暗黒ニノ粗拙ナル浴場ヲ設ケタ  
 リニニ一時勢力全世界ヲ併合スル盛トナルニ  
 及テ諸事驕奢ヲ競ヒ就中浴場ノ如キ構造ノ美  
 麗ナル一見ニテ人ヲ驚カスニ至レリセホカ曰  
 ク一羅瑪人モ其浴場ノ壁ニカシキオンダリ  
 ン大理石ヲ用ヒミエニジセ縁ヲ備ヘダヒル  
 石ニ水ヲ貯ヘ床ニハ金剛石真珠純銀ヲ并ニ柱  
 梁ニ有名ナル工人ノ画及ヒ像ノ彫刻アルニテ汚垢莫塞ナリト思フナリ其他別處  
 入理毛人洗滌人琢磨人粧飾人整衣人結髮人及ヒ浴場諸執事具ヲ

和蘭使節ハオリスニテ驚讚スヘキ温泉ニ浴  
 シ大ニ爽快ヲ得タリ其他博多及ヒ肥前候ヨリ  
 モ厚遇ヲ受タリ馬及ヒ運支ヲ供セリ凡ソ通過  
 スル所ノ市街ハ到着前ニ奇麗ニ掃除セテ不  
 フリメトトノ所奉行市外ニ出テ使節ヲ迎ヘ市中  
 ニ誘引セリ前驅ニハ日本軍卒五人アリ次ヲ奉  
 行ハ騎馬ナリ旗持一人竿頭ニ四角ナル旗ヲ掲  
 ケ手ニ竿ヲ握リ次ヲ將軍ノ護兵長及ヒ指令官  
 連行ニ共ニ長竿ノ日覆ヲ立ツ各三人ニテ之ヲ  
 執ル此兵士ノ後三轎ナリ中轎ハ蘭使ニ供スル



所ナリ。銳手及ヒ騎兵從リ。ウネワリメトハ小市ナリドニ河ニ沿テ多魚ナリ。前岸ニハ慰樂スヘキ連山アリ。各種ノ樹木ヲ植工。此川市堤ノ大部ヲ占ム。此堤斷所アリ。堤上ノ高木流水ニ映ス。川水布ニ沿テ流テ曲ニ入ル而シテ石橋下ヲ過テ高麗海ニ急津ス。此橋ハ大石ニ成ル。中間稍凸ス。八枕アリ。双方ニ石欄ナリ。非常ニ闊シ。橋ヲ過クシハ税関アリ。濱ニ在テ市向リ。凡ソ通過スルノ船舶制法ニ依テ税ヲ收ム。送り快ナキ者ハ死刑處ス。橋ハ堤ト川トノ間ニ終ル。兩方下ニ河注ク。

三

此堤ト川トノ間ノ道ヲ進メハ市ニ達ス。門ハ壁ナリ。廣キ市ノ屋間ニ在リテ中間ニ柵アリ。之ヲ過テ市ニ入ル。行ケテ久ヒカラス。立派ナル寺アリ。坊主住ス。其通街ノ外彼此ニ部街アリ。殊ニ聳起スル岩ニ倚ル頂上ニ至ルノ階級ハ迂回ニテ岩ヲ彫ルナリ。頂上表面堅固ナリ。壁及ヒ塔ハ數里外ヨリ見ルヘシ。最高塔ハ五層ナリ。愈上レハ愈小ナリ。第二層ハ二美室ナリ。最下層ヨリ小ナルニアラス。此塔上ヨリ眺望スレハ稻田濶且ツ長ク。樂シムヘシ。一方ニ閑靜ナル丘陵アリ。教



種ノ樹木繁茂ニ樹間部街アリ

五月十六日インゴトキ長寄ニ着ニ出島在留東

印土商會附属諸輩ノ安全ナルヲ見タリ

野母番所ヨリ長寄奉行ニ註進スル所アリニ帆

船遙カニ進来スルヲ見ルトイレゴトキ許可ヲ

得テ小舟以テ之ヲ聞見セシトス則チエリス

トホーゲレトノ三小舟ヲ海ニ出ス而メ早ク

知ル是ガラーヘランドレデヒレキニ船長寄ニ向

一来ルナリ一書ヲ寄ス千六百六十年五月十八

日附セイラレシヤ城ニテ記シヌレゴトキヨイ

イトヨフンウーチーレスリトレワーヘレシト

マスフハレエーベレシ及ヒガヒワトハルトエ

ウラユルヨリスル所ナリ

其文ニ曰ク四月三十日因性爺小舟三百艘ニ多

人ヲ載セテキトモイセ濱ニ進ニ臺灣ニ上陸ニ

直チニ全島ヲ押領シアロヒシミア城最初ニ支

那人ニ襲ハル臺灣ニ散在セル阿蘭人残酷ニ殺

戮セラルゼラレシヤ城下市街各所放火セテ

全街乱暴ヲ蒙ルト

ゼイラニニア城圍ニ攻メテラレデヘクトル船偶

ヨイニヤシキニ  
姓多シニ  
アラヤ



又前々イラレニア  
城ヲ攻メ

自火ニテ焼失シ一人ヲモ遺オスノガライヘ  
レデ及ヒマリアアレ氏固ヨリ國性爺ノ船ニ敵  
スヘキニアラス故ニ掠奪セラレタリデヒレキ  
及ヒイムノホイルニ船ヲラレゴヨリ来リタシ  
モ食料ノ不足ニ由リ且ツ敵ニ襲撃セラレニ由  
リ路ヲ轉シテ日本ニ向ハサルヲ得ス則チ救援  
ノ人員及ヒ二船ノ為ニ麥粉米及ヒ酒ヲ載テ再  
ヒ彼方ニ向ヒ以テセラレア城ノ食料欠乏ヲ  
叔ハレラテ敬スト  
イシデキ此衷傷スヘキ信ヲ詔官ヲシテ長寄

奉行ニ報セシム而ノガライヘラシデ及ヒデヒ  
レキハ出島ニ停泊セリ奉行臺濟事情ヲ筆記シ  
イシデキノ依頼ヲ詳記セシムル為ニ商官ニ  
コライスルコトヲ「説法者マルキエスマエウ  
ス及ヒガライヘレラド」ノ船主ヲ上陸セシメ  
更ニ全景況ヲ開陳セレム此時イシデキ國  
性爺ノ十二砲アル臺場ヨリセラレゴア城ヲ  
晝夜打砲攻撃スルヲ知レ氏營ハ既ニ上下顛覆  
シ壁ハ砲彈ニテ破レリ然レ氏損害兵卒ニ及ハ  
スコイトトモ多人ニ襲ハレ臺場ハ棄ハレ大砲



臺灣事件  
江戸上申

十二門ノ内二門ハ城内ニ引キ入シ他ハ釘閉ス  
六月十日迄臺灣ヲ攻メタリセシテ未  
夕陥ラガシ氏食物罄敗且ツ缺乏スルヲ以テ寧  
口日本ニ航スルヲ勝レリトス是壺ニ休食セ  
トスル為ノミナラス更ニ人数ヲ募リ救援ヲ東  
仰シ商會ニ供セシカ為ナリ然ラガシハセ  
シジア城國性爺ニ曝露シ其勢直チニキエ  
シグニ向ヘ来ルヘシ此時ガラーヘラド六月  
十三日ニ投錨シ勉テ形急ス  
ラ載ス蘭婦人三人キエラレグ人十一名小見  
十六人買奴男女合二十八人アリ船内混雜スル  
ヲ以婦人及ヒ小見ハ出イ山ニ上陸セシメト敬  
スト  
イシデーキ此話ヲ日本詔ニ訊シ長崎奉行ニ呈  
セシム國性爺ハ是ヨリ先キ九年前在臺灣ノ支  
那人ニ密約ニセララセシジア城ヲ襲ハシトシタ  
ルナリ然レ氏其隱謀發覺ニタルヲ以テ主謀  
者刑ニ處セラレタリ此時セラレシジア城ハハ  
イハトノ指揮ス所ニテ城兵充備ニタルヲ以テ  
速カニ國性爺ニ抗拒ニタレハ支那人ハ志ヲ得



カリシ。然し凡國姓爺ハ弟一衆ニ於テハ効ヲ為  
サズリ。トシ凡尚其志ヲ變セス。機會ヲ待ツ者  
ニ似タリ。殊ニ横着ナル支那人ゼンキエア大全  
ヲ以テ東印土商會ニノミテラズ臺灣ニ於テ許  
多ノ自由貿易人ニ賣買ニタリ。而メ此ビンキエ  
アノ逃走ニタルハ危且ツ害アリ。是臺灣ノ景况  
ヲ熟知スルハナリ。察スルニセリ。ラロビア城ノ  
全景况ヲ國姓爺ニ露呈ニタルナルヘシ。國姓爺  
ハ數年來臺灣ニ着眼シ。其機會ヲ待テ志ヲ達セ  
シトスルノ企謀次第ニ增長シ。此評判ヲ諸道ニ

四三

傳搬ニ多人ヲ嘯集シ。一大船隊ヲ編製シ。以テ臺  
灣ヲ奪ハシトス。コトハ諸事ヲ熟慮シ。一書ヲ  
裁シ。支那船ニ托シ。國姓爺ニ寄ス。曰ク。募金ニテ  
以テ大船隊ヲ準備スト。

臺灣ノ景况  
國姓爺ニ寄ル書

町奉行直千三インデノキノ書ヲ長崎ヨリ江戸  
ニ送り。將軍ニ捧ケリ。此書ヲ送ルノ後多載ノ一  
船アリ。其紐キ帆柱ニ各種ノ吹流。及ヒ旗ヲ飄シ  
出島ニ向テ駛セ来ル。支那船至所奉行ニ對話シ  
曰ク。國姓爺自ラ臺灣ニ至リ。全地ヲ押領セリ。百  
四十人ニテ守ルノセリ。ラロビア城ヲ攻撃シ。セ人



ヲ殺シ。且ツ蘭船三艘ヲ燒キ。二艘ヲ海止ニ逐ク。  
十一日。前ニアソハイヨリ。更ニ新軍勢ヲ進メ。臺  
灣ニ向テ。國姓爺ヲ助ケリト。

イニデ。一キ。町奉行彦右衛門殿ニ書ヲ捧ケテ。諸  
テ曰ク。國姓爺ハ東甲土高會ヲ敵視シテ。大ニ損  
害ヲ加ヘタレハ。之ニ報フルニ。國姓爺ニ屬スル  
船ヲ海止ニテ。斃ハシ。欲スルナリ。此事許可ア  
ラズ。テ。望ムト。彦右衛門殿答テ曰ク。是ハ小事ニ非  
ズ。余カ一存ニテ。可決ス可キニアラス。  
逐一江戸ニ言上シ。將軍政府ノ令ヲ待ツヘキナリ。

リ。日本ニ於テ支那高事ヲ害スルカ如キハ。恐ラ  
クハ將軍ノ耐ヘ得ル所ニアラザル可シ。營ニ此  
巨額ノ高事ヲ廢スルヲ好マザルノ之ナラス。支  
那ヨリ日本ニ備フル所ノ乾藥ノ如キハ。決シテ  
缺クヲ得サル所ナリ。若シ阿蘭人甲兵ヲ國姓爺  
ニ向テ弄スルニ。臺灣若クハ其近辺ニ於テセリ  
固ヨリ關係セサル所ナレバ。國姓爺ノ支那船ノ  
日本ニ向テ若ク海上ニ要撃セントスルハ。許ス  
所ニアラザルヘシ。

イニ。一キ。彦右衛門殿ニ答フル所ナリ。如シ。江戸

江戸  
彦右衛門殿

四



政府ニテ豈ニ公然タル敵ニ恨ヲ報スルヲ惡ク  
聞クテアラフニヤ。是萬民ノ通知スル所ナリ。東印  
土商會ハ國姓爺ノ為ニ大損害ヲ蒙ルヘリ。豈ニ  
之ニ報スル所ナラヘキニヤ。國姓爺ノ船ヲ控奪  
セントスル。伯帶比亞領事ノ規則ニ據テ行ハ  
サレテ得サル所ナリ。是固ヨリ日本人ノ味ヲ容  
ルヘキ所ニアラス。又支那貨物及ヒ乾藥ノ如キ  
ハ。廣東及ヒ南京船ヨリ夥シク輸入スル所アレ  
ハ。假令國姓爺ノ船ヲ悉ク控奪スル。テアラフモ  
少障害モアラサル可キナリ。若シ又日本海路國



